



戦後七十年 平和祈念集

いきがい大学伊奈学園専科一期校友会

みんなの広場で戦後70年平和祈念を特集しますご協力を！

＝お寄せ下さい、戦後70年を生きる私達の平和への思い＝

政府・与党は「集団的自衛権の行使」容認など戦争のできる国へと舵を切り、その動きを加速化させていますが、反対する人、賛成する人それぞれ様々な意見があることは当然なことです。様々な意見が飛び交う中で誰しも認めているのは「戦後70年間、戦争せずに日本は平和を守ってきたこと」です。私達の仲間である関利雄さんは、戦争体験者であり今日の平和を守りたいという思いから、「戦争の恐ろしさ」の語り部として講演活動を続けています。

2015年は戦後70年の節目の年です。会員の多くの方は自分の人生の流れとほぼ一緒であり、感慨をもっておられると思います。私達の周りには、戦中・戦後を生き抜いてきた多くの方がすでに亡くなっており、戦争体験等の記憶や思い出も風化しつつあり、戦争や戦災を体験した人たちは少なくなっています。その人たちから聞いた話でも残したいという思いや、伝えるのは私たちの世代の責務ではないかという思いから、校友会の皆様の中にある戦争や平和に対する想いを一つでもお寄せいただければと思っています。

先日、21期校友会民話の会で熊谷の空襲のお話で「星川の提灯」を聞き、初めて熊谷の空襲を知りました。戦争の悲惨さを知らない子や孫の世代そして後世の人々に平和の尊さを引き継いでいくことは私たちの責務と考え、今回は専科一期校友会HP「みんなの広場」で特集をくみたいと思いますので是非投稿して下さい。よろしくをお願いします。

●題名は自由（戦中戦後の体験等・見たり聞いたりしたこと）

戦場・軍隊での体験、外地・引上げでの体験、空襲・被災の体験、学童疎開・学校生活の体験、勤労・学徒動員の体験、原爆の体験、戦中・戦後の生活の思い出、両親や祖父母、兄弟や親類などから聞いた戦争・戦災の体験談、日本の平和に対する思い

●字数＝何字でも結構です

●メールで送る場合のアドレス➡haikubaka59@yahoo.co.jp 岡村まで

●郵送の場合は、学生名簿の住所でお願いします。

●締切7月31日

専科一期校友会HP管理人・広報部長 岡村昭則

目 次

(投稿順に掲載しています)

1、太平洋戦争体験記＝関 利雄	P 4
2、終戦の年国民小学校に入学しました＝小金澤憲男	P 6
3、平成17年7月28日の日記より＝岡村昭則	P 7
4、平成17年10月21日の日記より＝岡村昭則	P 8
5、戦後70年平和祈念に広島を訪れる＝岡村昭則	P 9
6、“お国のために”＝埴 恒雄	P 17
7、占領の置き土産＝角田 進	P 18
8、羽田で出会った少年兵＝角田 進	P 19
9、「明日への遺言」を見て＝角田 進	P 20
10、太平洋戦争開戦の年に生まれて＝伊藤盛夫	P 23
11、戦後70年の思い出＝瀧澤正高	P 24
12、戦争について思うこと＝大森 勇	P 25
13、何時になったら戦争の無い平和な世界が来るのでしょうか？＝浅見法子	P 26
14、戦後70年の経過について＝伊藤 登	P 27
15、残された出征の一枚の写真＝岡村昭則	P 28
16、郷土コースの戦後70年平和祈念集作成応援合唱	P 30
17、日本は戦争してはいけない＝梅田 博	P 32
18、戦争の傷跡、そして平和を願って…＝新井貞男	P 33
19、終戦の年に日本に帰る＝有村 博	P 34
20、祖父を顧みて平和を願わずにはいられない＝蔦川忠義	P 35
21、人生のプロローグ＝岡田時雄	P 37
22、母から戦時中の話を聞きました！＝久保田圭子	P 39
23、戦死の父、熊谷空襲、そして今思う事＝北氏和雄	P 41
24、この夏特に思うこと＝高橋幸子	P 45
25、終戦の日（満4歳4ヶ月）の体験＝森田啓資	P 47
26、戦争とは＝伊藤昭子	P 50
27、星川の提灯＝21期民話の会	P 51
28、我が引上げ記＝野村侃滋	P 53
29、戦後70年平和だった日本に危機感を感じる＝松山ノブ子	P 57
30、戦争のない平和な社会が続くことを願っています＝斎藤志津子	P 58
31、学童の縁故疎開＝田中 忠	P 59
32、我々の出番はなんであろうか＝平林和人	P 60
33、残っていた2枚の写真＝玉置貞明	P 61
34、靖国とアウシュビッツ＝安藤允浩	P 62
あとがき	P 65

何か運命を感じた6月25日

まちづくりコース
関 利雄

「戦後70年平和祈念集」を専科一期校友会「みんなの広場」で編集されることを知り早速お便りを差し上げた次第です。今朝、岡村さんからのメールを拝見して何か運命を感じた次第で、それはこれからお話をする私の戦争末期の豪北にあるインドネシア領セレベス島での米軍B-24との空中戦日時昭和20年6月25日で奇しくも今日と同じ日付であったからです。

さて、私の戦時中の行動は別冊「太平洋戦争体験記」にありますように大変長くそして多岐にわたる行動ですので、本日は同封しました対爆機戦闘詳報によるセレベス島でのB-24にまつわるその後の事実について記述します。

昨年、ひょんなことから北浦和に住むアメリカで30年以上生活をされた今吉さんという80代の方と知り合い、その後、今吉さんの知人であるウィリアム スインさんと知り合い(元米軍パイロット退役後アメリカン航空勤務)、この方から今吉さんを通して戦争中の情報を頂いており、昭和20年2月1日に私が撃墜したB-29の搭乗員12名のお名前と住所も知りました。全員が死亡してマニラに記帳されているようです。

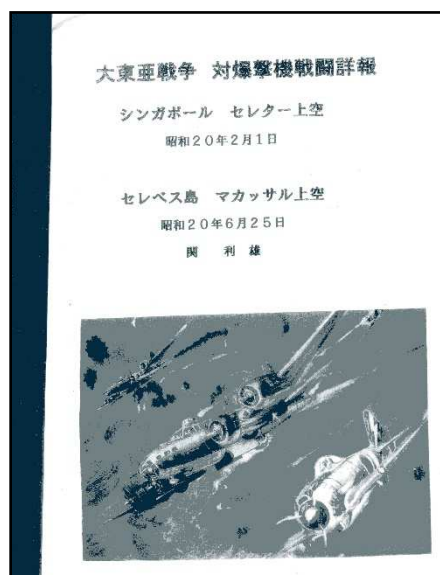
6月25日のセレベス島での戦闘ではB-24は海岸付近に墜落炎上しましたが、10名の搭乗員の内6名は墜落時に死亡、残りの4名は日本軍に捕らわれ海軍により処刑されております。

この機の機長ベリー中尉とゲルツ伍長の共に甥御さんである方からウィリアムさんを通して連絡をいただき写真の交換等もしました。なお、現在も時々連絡があり、私としては非常に複雑な思いです。

当時としてはあの爆撃機を撃墜したという荣誉と感激もあり誇らしく思っていました、今回のご遺族さんからの連絡には戦争とはいえ多くの方が亡くなられており、まして、ご遺族さんの心情を思うにつけ複雑な心情です。まだこれからも連絡があるとおもわれますので、後日また連絡を差し上げます。

6月25日(B-24乗組員のご命日)

合掌



敵と対峙30回常に恐怖

関 利雄さん (91)



「戦争の恐ろしさを伝えたい」と話す関利雄さん＝さいたま市北区で

語り継ぐ

戦後70年

4

少年飛行兵

一九四四年一月十八日の朝。当時二十歳だった関利雄さん(左)さいたま市北区は戦闘機「隼」を操縦し、高度五〇〇〇呎の空にいた。中国とビルマ(現ミャンマー)の国境近くで、

燃料を運ぶ途中の連合軍輸送機を攻撃する作戦だった。寒さと怖さで体がブルブルと震え、歯はガチガチと音を立てた。「敵機を発見したときは、無我夢中で機

関機の風防ガラスの後ろに



初陣から戻り、戦闘機「隼」から降りる関利雄さん(1944年1月18日撮影)＝タイ・チェンマイで



仲間と記念撮影をする関利雄さん(前列左)、1944年9月撮影＝シンガポール・センパワンで

「戦争の恐ろしさを伝えたい」と話す関利雄さん(左)さいたま市北区で

茶色の油が付いたことがあった。その油を見て「敵機だ」と、何度もハツとした。それほど緊張していた

東京・本郷で生まれた関さんは十六歳で東京陸軍航空学校に入校し、「少年飛行兵」と呼ばれた。同期は千三百人ほどいたが、約七百人が戦死した。

シンガポール北部のセンパワンの飛行場で任務に就いていたとき、終戦を告げ

約八カ月間を何とか生き

延び、日本に戻った。加須市で食糧配給関係の仕事をした後、東京都内や戸田市の競艇場でレースの審判員として働いた。結婚して三人の子とも五人の孫に恵まれた。自身の戦争体験を語り始めたのは五、六年前からだ。さいたま市の地元

の公民館や福祉施設などで毎年講演をしている。

「戦時中は戦争で功績を挙げた人が褒められ、人が死ぬ怖さが伝えられなかった。戦争の恐ろしさ、怖さを体験した生の声を聞いてもらうことで、戦争は二度とやってはいけないということ

(井上真典)

終戦の年、国民小学校に入学しました

まちづくりコース
小金澤 憲男

昭和 20 年 4 月長野県北牧村国民小学校に入学しましたが当時は戦争まっただ中ランドセルなどなく母が堅い布で作ったランドセルのようなものを背負って学校へ行きました。時々空襲警報のサイレンが鳴り近くの防空壕に逃げ込むと防空壕は避難してきた近所の人たちでいっぱいでした。家の電気の明かりが漏れるとまずいので布で覆い、家の壁も白と目立つのでよく覚えていませんが炭みたいなもので黒くしましたが子供心にこんな山の中の住宅地に爆弾が落とされるとは思っていませんでした。でもサイレンが鳴るで恐怖感を覚えました。8月15日終戦となって天皇陛下の玉音放送がありました。記憶はなくただ何となく戦争が終わったなあという記憶しかありません。教科書の国家発揚の文は黒く塗りつぶしました。1年生の時の教科書はまあまあでしたが2年生の時の教科書はガリ版ずりでひどいものでした。2年生の終わりに担任の先生が退職するので校舎の前で撮った写真がありますが着ているものはみすぼらしいもので校舎の窓はあちこちガラスがなく紙が貼られていました。



還暦を迎えたる終戦忌かな

(平成17年7月28日の日記より)

郷土コース 岡村 昭則

2005年は戦後60年にあたり歴史の節目を刻む年でもある。太平洋戦争の拡大に伴って家族は、父だけ東京に残して母子4人のみで東京都新宿区上落合から山梨県身延にある母の実家へ疎開したことをおぼろげながら覚えている。疎開先で小学校2年まで過ごしたこともあって、その間の様々な思い出は鮮明に脳裏に焼き付いている。新宿区上落合での戦争の思い出として、軍隊の行進や防空壕に入ったこと、身延へ疎開するために乗車券を買うために、母が弟を背負い私の手を引いて東中野駅に並んだこと等が断片的に蘇るのみであり、直接戦争の影響を受けたわけではないので疎開したことの意味すら知らない子供の私であった。



疎開してから戦争とは何か小さいながら知るようになったのは、母の弟が満州に出兵していること、身延病院に大勢の傷病兵がバスで搬送される様子を見たこと、裏山で米軍の

飛行機燃料タンクが発見されたこと、山麓に飛行機の部品工場を作るとかで部落中の人々が駆り出されたこと、同級生のお父さんの戦死で地区を代表して葬式に出席したこと等様々なことが私の周りで起きていたことが挙げられる。終戦は母や近所の人たちの話を聞いて知った。その後、叔父さんが戦地から、従兄が満州の師範学校から帰還したことから終戦を実感した。その後、身延線に米軍兵士専用電車が一両連結されたことで興味津々と外国人を見た思い出もある。

終戦後の生活の苦しさは身延にいる時は食べ物もあり感じなかったが、小学校3年の時に東京に戻ってから高校を卒業するまでの生活苦は続き、私自身も小学校6年から新聞配達はじめ様々なアルバイトをしながら大学を卒業した。この頃は日本全体が貧しかったこともあってか、子ども達はみな生き生きした笑顔をもっていたことは確かだ。廃墟化した敗戦日本が米・ソ冷戦構造の中で経済復興を果たし、今日の国民の生活を豊かにした日本経済のベースを確かなものにしたことは間違いないが、日本経済もバブルで崩壊し、グローバル化の奔流の中で改革競争に出遅れて、巨額の負の遺産を抱えた時代に突入し、抜け出すためゼロ金利政策など国民の犠牲の下にもがき苦しんだ挙げ句やっと出口の見えだしたこの頃である。60回目の終戦記念日を迎えた日本は、もはやグローバル経済の中でしか活動せざるを得ないことを考えると、国際協調なしには外交や貿易の前進も望めないことを認識しなければならない。戦後日本は軍国主義への痛切な反省の上に出発し、平和外交が国際社会の信頼を勝ち得てきたのに、首相がA級戦犯の祀られている靖国神社に参拝することでアジア諸国の人々をどれだけ傷つけていることか。今日の平和は一国のみならずグローバルにあるべきものであり、そのことからしても日本は戦争のけじめをあいまいにせず隣国を思いやる心をもつことが真の平和につながると信じて止まない。

山小屋で語った平和への思い

(平成17年10月21日の日記より)

郷土コース 岡村 昭則

私が学校を卒業して就職したのは都庁の建築局だった。当時の職場に都庁山岳部の先輩たちがいたことから、スキーの手ほどきを受けたり、山岳スキーにあちこち連れていってもらった。現在80歳を越える先輩が定年退職後、私が万年幹事を引き受け、年一度の懇親登山を続けて20年が経つ。参加するメンバーは冬の乗鞍岳冷泉小屋合宿に参加した仲間たちである。年一度山小屋でお酒を酌み交わしながら山談義、世界史、日本史、平和の問題等様々なテーマを取り上げて、夜更けまで話し合うのが常である。今回は大河原峠から双子山登山後、山小屋で懇親会が始まった。



今年は日本排他的経済水域での中国の一方的石油発掘や、北朝鮮の拉致等の問題も話題になった。そもそもこのように隣国になめられるのは、大方の意見は憲法9条で軍隊を持つことを禁止されていることだという。私も同感今の自衛隊は軍隊でないから行動を制約されていることもあって積極的に国を守ることができない。そのためにアメリカと安保条約を結び日本を守ってもらっているのが現実。とはいうもののアメリカは自国の国益を守る

ために結んでいるに過ぎないのだが。現在の日本人は平和ボケして平和に対する認識が薄く、平和が軍隊の力を背景に成り立っていることを理解していないことや、60年前の大戦を体験して平和の尊さを、身をもって学んだ世代が少なくなり、今や平和の尊さを知らない世代が大半を占める人口比率であることなどから政治や国際政治の力学への関心も薄れてしまっていることをみな嘆いていた。

この60年を振り返って見ても、戦後、日本は「平和」を基本理念として、国民のたゆまぬ努力により、目覚ましい発展を遂げ、今日の平和と繁栄は大戦での多くの犠牲者の上に築かれたことは言うまでもないことだが、その影には日米安保条約によって日本の安全をアメリカにお任せして、軍事費に大金をつぎ込んで来なかったことも大きな要因の一つであることも忘れてはいけないのである。平和とは綺麗ごとで済まされないことを国民は知るべきである。日ソ不可侵条約を結んでも先の大戦でソ連が突然参戦していることや、ことが起きた場合に国連を頼みにしても、国連加盟国がそれぞれの国益を背負っていることを考えれば、何もできないことは事実で、共産党や社会党のいう憲法改正反対だけでは国民を守れないので、時代に応じて憲法と法律の改正を国民に建議し、専守防衛に徹して国民を守ることを最優先とすべきである。対米追従一辺倒を止め真の日本の独立を目指し、貿易でしか生き残れないのだから全方外交を強めるべきだと言うのが大方の意見だった。

ましてや今日の日本経済を支えている石油問題にしても綺麗ごとだけで済まされない国際問題が絡んでいることを忘れてはいけないとことも語られた。どうあれ先の大戦で多くの方々の犠牲の上に今日の日本もあることを忘れることなく、二度と繰り返さないためにも平和を守ることが現代を生きる日本人に課せられた義務でもあることを誰しも痛感していた。翌日は上田市の無言館を訪れて戦没画学生の作品を鑑賞し平和を祈った。

★平和とは何か議論の夜長かな

戦後70年平和祈念に広島を訪れる

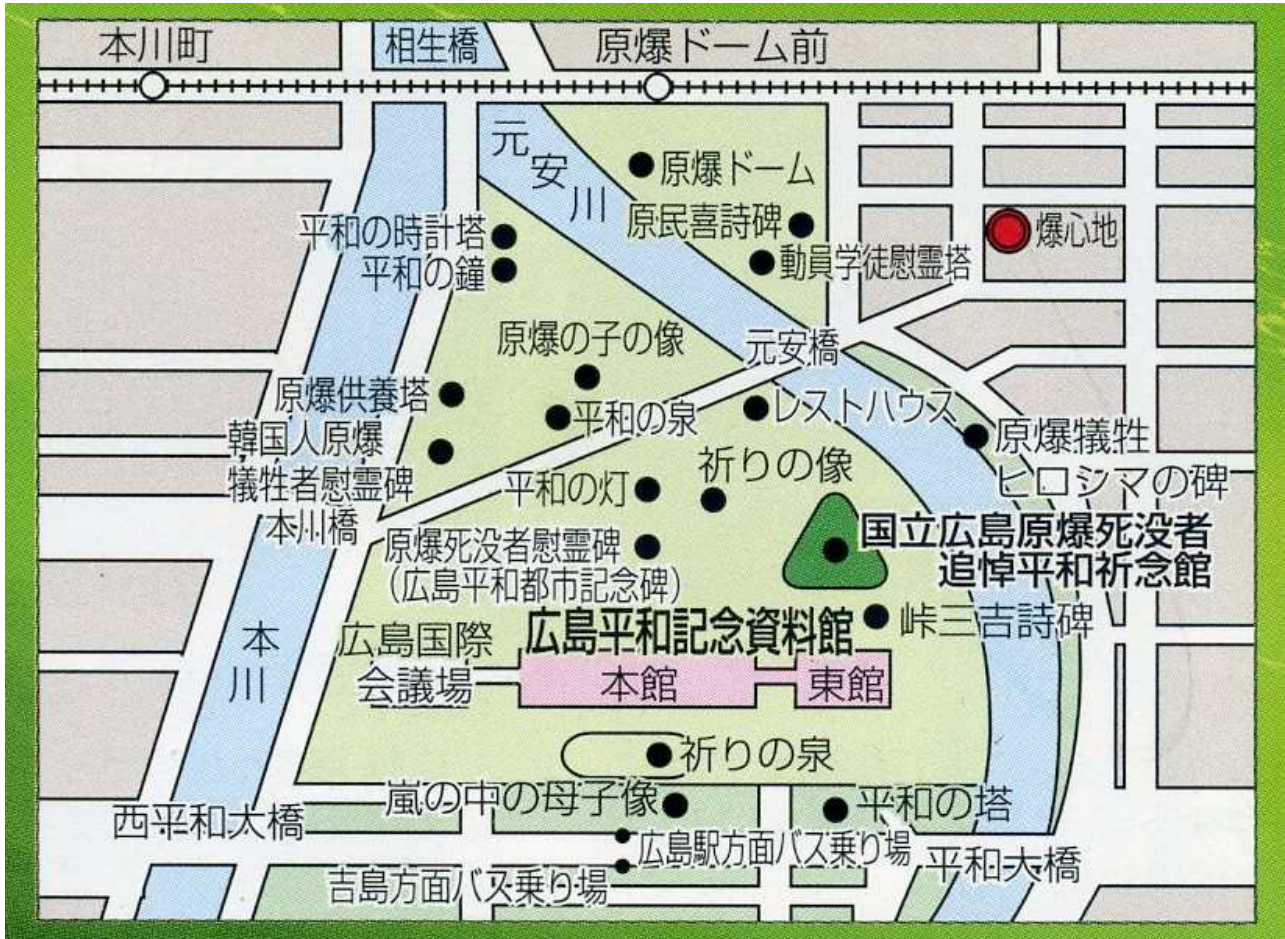
(H27. 5. 22)

郷土コース 岡村 昭則

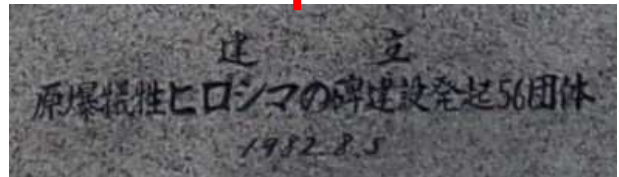
リューマチで足が不自由な妻が、今年は戦後70周年であることを知ってか元気なうちに是が非でも広島の平和記念公園を訪れたいというので、それを最優先させて山陽路の旅を計画した。錦帯橋～宮島と旅してから真昼の広島平和記念公園を訪れた。

1945年8月6日、アメリカ軍が投下した原子爆弾は、広島市を一瞬にして壊滅させた。それから70年が過ぎて市内は跡形もなく復興しているとはいえ、市内各地に当時の惨状を伝える碑がたくさん残されている。特にその惨状の姿を後世に伝えるため広島県産業奨励館の大破した残骸の（頂上の円蓋、鉄骨の形＝原爆ドーム）保存について、これまで大規模保存工事が3回行われ、平成7年(1995年)6月に国の史跡に指定され、平成8年(1996年)12月、世界文化遺産へ登録された。現在では、被爆当時の惨状を残す姿がノーモア・ヒロシマの象徴として、時代を越えて核兵器の廃絶と恒久平和の大切さを世界へ訴えるシンボルになっている。だからこそ広島の街とそこに住む人たちの健康被害が今日も続いていることを鑑みても、

広島平和記念公園内に広島平和記念資料館・広島国際会議場、原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑・原爆供養塔・平和の鐘・原爆の子の像・国立広島原爆死没者追悼平和祈念館等があるにせよ、**広島市そのものが原爆被災の資料館であると言っても過言ではない。**



我々は平和大橋から元安川に沿って爆心地に近い原爆ドームまで歩き、そこから元安橋を渡り平和記念公園に入った。原爆ドームまで`の川沿いの遊歩道にも数多くの碑を目にすることができた。また、原爆ドームには大勢の外国人が見学していた。



原爆投下により焦土と化した広島市の全景



●瓦の発掘と記念碑建設

1981（昭和 56）年、広島市が元安川の美化工事にのり出した時、高校生たちは、瓦の発掘と平和への決意を固める碑の建設を呼びかけました。戦争も原爆も知らない世代が中心となりつくりあげたこの碑には、彼らの努力の結晶である「原爆瓦」がはめこまれています。

碑文

「天が まっかに 燃えたとき わたしの からだは とかされた ヒロシマの叫びを とともに 世界の人よ」

●動員学徒慰霊塔

政府は労働力の不足を補うため、1944（昭和19）年8月に学徒勤労令を発し、中学生以上の生徒は軍需工場等での勤労奉仕が強制されました。また、11月には、空襲による延焼を防ぐため、民家などの建物を取り壊し、防火地帯をつくる建物疎開作業にも、多くの生徒が動員されました。広島市内でも被爆当日、市内で建物疎開作業を行っていた国民学校高等科以上の8,000人以上の生徒のうち、約6,300人が犠牲となりました。その他に市内の各事業所に出ていた多くの学徒も犠牲者となりました。



●原民喜詩碑

詩人原民喜は、40歳の時に幟町の生家で被爆し



ました。前年、最愛の妻と死別していた彼は、孤独と絶望に打ちひしがれながらも、生き残った者の使命として被爆の惨状を伝える作品を書き続けました。

しかし、朝鮮戦争が拡大、トルーマン大統領の「原爆の使用もありうる」との声明などに失望し、1951（昭和26）年3月13日、東京中央線の線路に身を横たえ自ら命を絶しました。享年45歳でした。

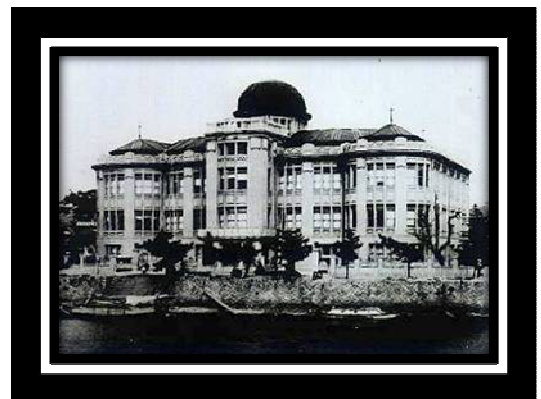
碑文（撰文）

「遠き日の石に刻み 砂に影おち 崩れ墜つ 天地のまなか
一輪の花の幻」（原 民喜）

『夏の花』自らの被爆体験を記録的に小説にした、原民喜の代表作。被爆した幟町の生家から逃れ、浅野邸（縮景園）で2日間野宿し、八幡村（現在の佐伯区五日市町）に移るまでの惨状をノートに記し、2年後に発表したものです。

●原爆ドーム

運命の1945年8月6日午前8時15分。人々が生活している広島の街に、人類史上初めての原爆が投下されました。原爆ドームから南東160メートル、高さ580メートルの位置で原爆が炸裂したのです。原爆による爆風は1平方メートルあたり35トンもの圧力を持ち、それによって起きた風は風速440メートルでした。産業奨励館はすさまじい爆風と熱を浴びて吹き飛ばされ、天井からは火が噴き出して全てを燃やしてしまいました。爆風がほとんど上から真っ直ぐ下に働いたので、本館は倒壊を奇跡的に免れましたが、中にいた人々は全員が即死しています。鉄骨部がむき出しのドームは残骸となり、産業奨励館は「原爆ドーム」





といつからともなく呼ばれるようになりました。1966年、広島市議会では原爆ドームの保存を決めます。風化が進んだドームのおおがかりな保存工事が、国内外からの募金により、これまで2回行われてきました。そして、この悲しい出来事象徴でもある原爆ドームを世界遺産に登録しようと、市議会だけではなく、広島市民一丸となって運動を行い、1995年には国の史跡に登録されて翌年、世界遺産への登録が実現しました。

★被爆の惨禍を伝えるとともに平和を訴え続けるシンボルとして、原爆ドームと呼んでいる建物は、チェコの建築家ヤン・レツルが設計し大正4年4月に建設された広島県物産陳列館です。広島県の物産品を展示したり、販売したりする施設でした。その後「広島県商品陳列所」「広島県産業奨励館」とその名前を変えています。レンガ造りで一部鉄骨が使用されていて、外装はモルタルと石材によるものでした。川辺に造られたその美しい建造物は、煉瓦と鉄筋コンクリートで作られた3階建てで、正面中央階段室を5階建てドームとし、一部に地階を有していました。屋根のドーム部分は銅板葺、そのほかはスレート葺とし、ドーム先端までの高さはおよそ25メートル、建築面積はおよそ1,002平方メートルでした。また、噴水池をもつ洋風庭園や、四阿をもつ和風庭園も整備されていました。当時としてはとてもモダンなものでした。広島の名所の一つになっていたのです。



我々は真夏の昼下がり、暑さには閉口して元安橋のたもとある茶屋でアイスクリームを買い、木蔭で舐めながら餌をねだりに寄ってくる人馴れした鳩や雀にウエハースを投げて観察する。特に雀の人馴れは見たことがないので興味しんしんだった。一休みしてから「原爆の子の像」に向かう。

●原爆の子の像

折り鶴が平和と結びつけて考えられるようになったきっかけは、被爆から10年後に白血病で亡くなった少女、佐々木禎子さんが大きくかかわっています。



佐々木禎子さん(当時12歳)は、2歳のときに被爆しましたが外傷もなく、その後元気に成長しました。しかし、9年後の小学校6年生の秋(昭和29年・1954年)に突然、病のきざしが現れ、翌年2月に白血病と診断され広島赤十字病院に入院しました。回復を願って包み紙などで鶴を折り続けましたが、8か月の闘病生活の後、昭和30年(1955年)10月25日に亡くなりました。禎子さんの死をきっかけに、原爆で亡くなった子どもたちの霊を慰め平

和を築くための像をつくろうという運動が始まり、全国からの募金で平和記念公園内に「原爆の子の像」が完成しました。その後この話は世界に広がり、今も「原爆の子の像」には日本国内をはじめ世界各国から折り鶴が捧げられ、その数は年間約1千万羽にのぼるとか。

石碑

禎子さんをモデルに作られた少女の像は、手を大きく上にかかげ、その手には大きな折り紙で折った鶴をモチーフにしたものを掲げています。「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和をきずくための」と石碑には刻まれています。石碑を囲むように置かれた千羽鶴は、大学生に放火されるなどしたこともありました。このような心ないことは、原爆で犠牲になった人達への冒瀆です。平和を願い、戦争のない世の中になっているのは、こうして多くの犠牲者がいたからこそだと言うことを忘れてはいけません。原爆ドームや平和記念公園を訪れることがあったら、観光だけの気持ちではなく、戦争で多くの犠牲者がいたからこそ、こうして現在の平和があることを思い出してあげてください。

●原爆死没者慰霊碑

次に訪れたのは、慰霊碑を訪れて祈りを捧げた。毎年8月6日、原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念するため、平和記念公園の原爆死没者慰霊碑(広島平和都市記念碑)前において、原爆死没者の遺族をはじめ、市民多数の参加のもとに平和記念式典を挙行しています。式典の中で広島市長によって行われる平和宣言は、世界各国に送られ、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を訴え続けています。また、原爆の投下された8時15

原爆の子の像

建立者:広島平和をきずく児童・生徒の会
制作者:東京芸術大学教授 菊池一雄氏

この像は、2歳の時に被爆した佐々木禎子さんが、10年後に白血病で亡くなったことをきっかけに、同級生たちが、「原爆で亡くなったすべての子どもたちのために慰霊碑をつくろう」と呼びかけ、全国の3,200余りの学校や世界9か国からの寄付などにより、1958年5月5日に完成したものです。

像の高さは9メートルで、その頂上には折鶴を捧げ持つ少女のブロンズ像が立ち、平和な未来への夢を託しています。側面には少年と少女の二体の像が配られています。

像の下に置かれた石碑には、「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和をきずくための」という碑文が刻まれています。内部につるされた鐘には、ノーベル物理学賞受賞者である湯川秀樹博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫られています。この鐘と金色の鶴は、2003年に複製されたものです。

広島市



分には平和の鐘やサイレンを鳴らして、式典会場、家庭、職場で原爆死没者に哀悼の意を表し、あわせて恒久平和の実現を祈り、1分間の黙とうを行っている。

●平和記念資料館

広島平和記念資料館は、原子爆弾による被害の実相を世界中の人々に伝え、ヒロシマの心である核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与することを目的に、1955年(昭和30年)に開館している。被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料を収集・展示するとともに、広島市の被爆前後の歩みや核時代の状況などについて紹介しています。

国指定の重要文化財である西側の「本館」と、東側の「東館」からなり、観覧は東館から入場し本館から退出するコースとなっている。東館には原爆投下までの広島市の歴史や原爆投下の歴史的背景に関する展示があり、本館では広島原爆の人的・物的被害に関する展示が行われている。特に、原爆投下直後の壊滅した広島市街地の縮小模型、熱線で全身の皮膚を焼けただれさせながら炎の中をさまよう**被爆者の等身大ジオラマ**(通称：被爆再現人形(後出))、被爆死した三人の動員学



徒が身に付けていた制服の残骸を組み合わせることで一体の人形に仕立てた「三位一体の遺品」や「黒焦げの弁当箱」など被爆死した動員学徒^[補足 1]たちの遺品、本通の住友銀行広島支店から1971年に移設された「人影の石」などがよく知られている。開館当初の広島平和記念資料館は現在の「本館」(写真の左手前側)のみであったが、設計者の丹下によってコンペ(広島平和記念公園及び記念館競技設計)当初より、資料館の



西側に「集会所」として広島市公会堂(現在の広島国際会議場)を、東側(画像の右手奥側)には広島平和会館本館(平和記念館 / 現在の東館)を配して、それらを空中回廊で結

んで3棟一体の建築とするよう計画されていた。

東館はリニューアル中で幾つかの展示品を地下の展示室で公開している。何と我々だけの見学でゆっくりとみることができたが、展示されている残された衣類や焼け野原となった写真、火傷している人々の姿やその他の品々から当時の事を想うと胸が痛むばかり。日本はこの原爆の悲惨さの体験を通して平和国家を目指すことを一点張り世界に

打って出るべきであり、原爆を落としたアメリカに諂うことなく平和外交を進めるべきだと私は思う。妻も開かれている本館も訪れたいといっているので杖を突き無理をしながら3階まで上った。





そこは有名作品展なみの混雑である。展示品の前には修学旅行生や大勢の外国人の列である。大勢の人が見て原爆の悲惨さを知り、核兵器廃絶に理解をしていただけることでも大事なことである。このような状況を日本が体験して、被爆された方々の土台の上に今の日本があることを修学旅行生には理解して忘れてもらいたくないのだ。こちらの展示は町全体の模型と原爆爆発の位置が記されている。そこは東日本の津波

跡と同じであるが、違うのは放射能に汚染で後世の人々を苦しめていること。そして模型を使ってリアルに我々に迫ってくる。



原爆投下時刻で停止している時計は人類最大の悪夢を知らせている。本館での見学を終えてから係員に話をし、会議棟に案内していただき、そのエレベーターで1階に降りてきたら、最初に東館を案内してくれたガイドの人が待っていたことに感激する。お礼を言うと自分も足の不自由な母がいるので妻を察していたという。妻の

念願だった広島平和記念公園、平和記念資料館、「原爆の子の像」、「原爆ドーム」等を見学出来てよかったに尽きる。資料館前から車を止めている駐車場までたいした距離ではないが、妻の足の事を考えてタクシーを拾う。駐車場に戻り広島を後にした。





●広島原爆跡地 外国人の訪問増

第2次世界大戦中の1945年、エノラ・ゲイは米軍が原爆投下用B-29を改造。1945年8月6日午前8時15分に広島県広島市に原子爆弾（原爆）「リトルボーイ」を投下したことで知られる広島に原爆を落としてから来年で70年を迎える。その惨状を記録した広島平和記念資料館は、今も入場者が絶えない。ジャパンタイムズ紙によれば、**2013年に同館を訪れた外国人観光客は過去最多の20万86人を記録した。**ナチス・ドイツの強制収容所や、カンボジアの大量虐殺が行われた収容所、奴隷貿易に使われた西アフリカの港、米ニューヨークのテロ跡地——。世界のそうした地と並び、広島を「ダークツーリズム」「追悼ツーリズム」「戦場ツーリズム」の地と呼ぶ人もいる。

★1996年にユネスコの世界遺産に指定された原爆ドームを見上げる観光客は、ほとんどが言葉を失って立ち尽くす。このドームは1915年にチェコの建築家によって設計され、市の産業振興会館として使われていた。米軍のB29爆撃機が広島に投下した原爆は、**市中心部の10平方キロメートルの範囲を破壊し尽くし、6万～8万人が死亡した。被爆者も含めると、犠牲者の合計は推計13万5000人に上る。**



- ★米国のエゴ丸出しや原爆忌
- ★夏空に雲一つなし原爆ドーム
- ★折ツルに平和を込めて去年今年
- ★夏来ればピカドンをもた思い出す

“お国のために”？

健康コース 埜 恒雄

私は終戦の1年前に生まれ、戦争の実感はありません。
ただ、テレビの戦後70年特集で広島・長崎での目を覆うばかりの悲惨な被爆実態や沖縄戦、東京大空襲などでの人びとの悲痛な叫び・苦しみなどを見ると戦争とは究極の人殺しとの思いを強く感じます。

私の父は満州の戦地に赴き、終戦で生死をさまよいながら帰国しましたが戦争のことは殆んど話しませんでした。ただ召集令状の赤紙が来たとき、親兄弟が目を真っ赤にして、泣きそうな小声で“お国のため頑張ってこい”と言われ、また出兵の時近所の人々から“日本国万歳”の言葉をかけられ、もう行って死ぬしかないと心に決めたと話してくれました。“お国のため”と言われると同意せざるを得ない殺し文句だと父は言いました。

最近の世界では“愛国心”の名のもとに無茶な行動に出たり、また“聖戦”の名のもとに殺人を正当化する風潮も見られます。

“お国のため”、“愛国心”等の言葉はすばらしい大切な言葉ですが、父の言葉を思い出し、戦争と結び付けて使用することは一考を要すると思います。



※写真は父のアルバムより

占領の置き土産

健康コース 角田 進

昭和20年8月、日本軍はポツダム宣言を受諾し降伏した。10月には皇居を見下ろす第一生命ビルに連合軍総司令部（GHQ）が置かれ、日本政府はその指揮の下に戦後政策を実施することになった。軍事占領にあたっては、中国・四国地方はイギリス軍が、その他の地域はアメリカ軍が受け持ち、その数は最大時43万人にも上ったという。

地方の県庁所在地で育った私が物心ついたとき、その占領軍（当時は進駐軍と呼んでいた）の兵隊たちの姿は日常の風景の中にあった。街には彼らのためのレストランやダンスホールが建つとともに、私の家からほんの2・3分のところに屋外ローラースケート場ができた。それは兵隊たちが持ち込んだアメリカの遊びであった。入り口には欧米系の顔立ちをした男女が組みながら片足滑走をしている大きな看板が掛けられ、1時間10円の料金を支払って中に入ると、一辺が25mくらいのリンクがあった。その四辺には木の手すり、足元にはタイヤを開いて伸ばしたものが張り巡らされていた。そして屋外にもかかわらず、終日スケーターズワルツなどのレコード音楽が拡声器から流れていた。

上の兄達はすぐに上達したが、幼かった私はたまに友達と行ってもなかなかうまく滑ることができなかった。しかし、兵隊たちが遊びに来ているなか、一緒に行った友達をさしおいてガムなどをもらうのは、一番小さい体でヨチヨチ滑っている私だった。彼らは見上げるように大きく、ピンクの肌をしていたのが印象的だった。

昭和27年のサンフランシスコ講和条約締結により占領は終わった。その後はスケート場の利用客は日本人だけになり、それも次第に減っていった。うるさかった音楽もたまにしか聞こえなくなり、いつしか道路が広がったとき取り壊されてしまった。（完）



羽田で出会った少年兵

健康コース 角田 進

私が大学生の時、二番目の兄はプラント建設の仕事で東南アジアへ出張していた。長い海外勤務が終わり帰国するとの連絡が入ったので、一番上の兄とともに羽田空港に出迎えに行った。昭和53年に成田国際空港が開港するまでは、すべての国際便は羽田から発着していたのだった。

到着予定時刻まで少し間があったので、空港のロビーをぶらぶら歩いていると、30人くらいの迷彩服を着た米軍兵士と出会った。彼らの顔をよく見ると、ほとんど自分と同じか少し年下に見えることに衝撃を受けた。この少年兵と言っても良い集団は多分、新兵としてベトナム派遣が決まり、乗り継ぎのわずかな時間をロビーで待機していたのだろう。折しもベトナム戦争の真っ最中で、毎日のように米軍戦死者の報道がされていた。彼らからは戦闘経験者の持つ「死の匂い」は感じられなかったが、不安を胸に秘めている様子は見て取れた。

外交政策において、一国の政治体制の変更を許すとそれが次々に広まってしまうという考え方を「ドミノ理論」といい、当時のアメリカ議会を支配していた。これを介入の理由とした為政者の命令により、彼らのような若者達のはるばる地球の裏側に当たる東南アジアの泥沼の戦場に赴くのである。彼らは何のために戦うのだろうか。家族や郷土を守るためではない。また、すでに南ベトナムの人たちを守る騎兵隊でもなくなっていた。世界中から孤立して戦わなければならない彼らを見ていると、平和な日本で暮らす同世代の私は複雑な気持ちになった。

ベトナム戦争は、それから数年経った1973年のアメリカ軍の撤退で実質的な幕を閉じた。近隣諸国で共産政権となったのはわずか二カ国であった。あの時出会った兵士のうち何人が、無事、国に帰れたであろうか。 (完)



明日への遺言」を見て

健康コース 角田 進

平成21年12月30日、どこの家庭でも正月に向け家の中の整理などを行っている頃であろうが、我が家では妻がこの日まで仕事があった。私は一人で昼食を済ませると、正月準備は明日二人でとばかり、リビングで寛ぎながらテレビを見ていた。リモコンでチャンネルをあちこち変えているうちに、映画をやっているのに気がついた。新聞を見ると「明日への遺言」、原作・大岡昇平「ながい旅」、主演・藤田まこととあった。見始めた私は、みるみるうちに画面に引き込まれていった。あらすじは次のとおりである。

★昭和二十三年三月、元東海軍司令官・岡田資（たすく）中将は、B級戦犯として巣鴨プリズンに収監され、その審理は横浜地方裁判所で行われることになった。岡田中将とその部下に対する起訴理由は、名古屋爆撃の際撃墜され捕虜となった三十八名の米軍機搭乗員に対し正式の手続きを踏まず処刑を行った、というものであった。岡田中将を始めとする被告人二十名のうち十五名は、捕虜斬首処刑の執行者であった。

主尋問が始まるまでの一か月ほどは、証人への尋問が続いた。検察側は、略式手続きは不当で、被告の行為は殺人であるとの証言を引き出した。これに対して弁護側は、死刑にされた搭乗員はジュネーブ条約に定める捕虜ではなく、無差別爆撃を行った戦争犯罪人であると主張した。岡田中将は略式裁判の正当性を訴え、この法廷闘争を法による戦い「法戦」と名付け、あくまで戦い抜こうと考えていた。

三日目の公判で、彼は「責任の筋を辿っていけば、司令官たる私にくる。司令官は、その部下が行ったすべてについて、唯一の責任者である」と発言した。この頃から彼の態度、言葉によって、全面的に責任を取ろうとしていることが明らかになった。

この映画は、冒頭を除き法廷内のシーンが多く、しかも米国側による審理という設定であるから、台詞は殆ど英語で字幕が使われている。感心したのは、悪名高い極東軍事裁判ではあるが、弁護人はあくまでも公正な裁判を目指しているように描かれていることであった。また、岡田中将の真摯で毅然とした態度に弁護人はおろか裁判官、ついには検察官までもが初めのうちは「オカダ！」と呼びつけていたのが、いつの間にか「ジェネラル（閣下）」と呼びかけるように演出されていたのも、あり得ることだと思った。

★そして最終尋問。裁判長から「我が国の軍法に報復は正当な行為であるとされておりますが、貴方の命令も報復だったのではないですか」と助命の水を向けたにもかかわらず、岡田中将は「報復ではなく処刑です」と答える。ここで報復でしたと答えれば、自らの命は助かる代わりに部下も同罪となるのだ。いよいよ結審。判決は岡田資、絞首刑。しかし他の十九名は、一名が終身刑だったものの、多くは懲役十年にとどまった。判決を受けた岡田中将は軽くうなずきながら裁判官を見上げた。そして法廷を出る間際、傍聴席から近づいた妻に一言、「本望である」と告げたのであった。

判決が出されると、岡田中将がかつて仕えていた秩父宮から、そして裁判の弁護人はおろか検察官から、さらには裁判官の一部からも助命・減刑嘆願が出された。しかしそれも空しかった。九月十七日深夜、アメリカ兵たちが威儀を正し直立不動の姿勢で迎えるなか、「ご機嫌よう」と言い残し、刑場へと続く扉の光の中へシルエットとなって消えていった。彼の独房の机の上には、家族への遺言とも言える手紙が置かれていた……。

見終わった私は、涙と鼻水で顔を汚したまま呆然としていた。このような軍人がいたと

はついで知らなかった。最近では国家や横綱、果てはペットまで「品格」の大安売りだが、岡田中将は日本人として本物の品格と誇りを失わず、自己責任を貫き通した。自分以外には一人の死刑判決も出させず、さらに処刑になるまでの日々を部下の減刑嘆願に費やした。その結果、翌年の三月には早くも十三名が出所できたという。それに引き替え、「生きて虜囚の辱めを受けることなかれ」と戦陣訓を出しておきながら、逮捕の当日慌てて小口径の銃で胸を撃ったが死にきれず捕まり、あまつさえ米軍司令官に自らの日本刀を献上したという東條某には呆れるばかりである。彼は戦後三十年以上経ってから靖國神社に祀られ世論の非難をあびたが、なに、きっと先に祀られていた数え切れない英霊たちから袋だたきにあっているに違いない。そう思えば腹立たしい気持ちも少しは収まろうというものである。

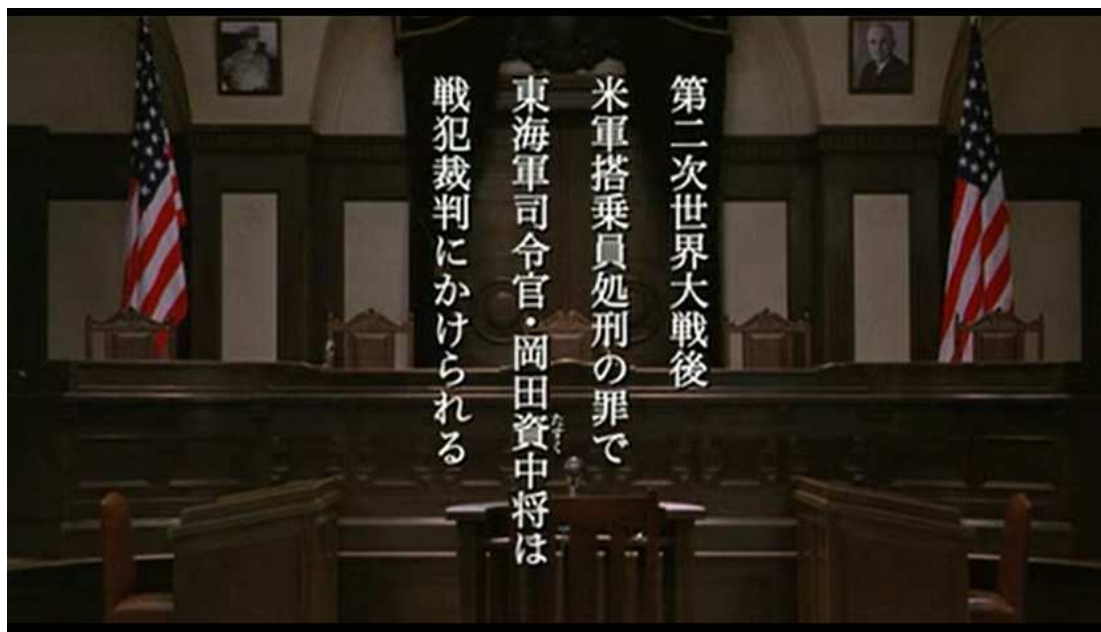
戦後、責任を取ろうとしないトップは枚挙にいとまがない。例えば弟子に罪をなすりつけようとした麻原彰晃や時津風。秘書が勝手にやったことと知らん顔を決め込む政治家。不祥事が起きたとき「後始末をしないで辞めるのは無責任」などと言ってなおも地位にしがみついたトップ。誰もあんたに後始末してくれなどと頼んではいない。さっさと辞めてくれればいいのだ。山一証券倒産の際、「すべて私たち（経営陣）が悪いんであって社員は悪くありませんから！」と涙ながらに叫んだ野澤正平氏は一服の清涼剤であったが、彼はそのとき社長就任三か月、巨大な簿外債務を押しつけた前社長・会長の犠牲者であった。

今や「清貧」「高潔」「矜持」が死語になりつつあるこの日本を、岡田中将が生きていたらなんと言うだろう。「こんな国になるのなら、あの時『報復でした』と答えれば良かった」と嘆くかもしれない。

ところで、本稿の執筆中に悲しいニュースが飛び込んできた。主演の藤田まことさんが2月17日朝、大動脈瘤破裂のため七十六歳で亡くなったというのだ。

彼の芸歴はテレビ、新聞等で紹介されているが、もともとは歌手志望であったという。だが、なかなか売り出すことができず、歌謡漫談や物まねに転向していった。その頃の彼をおぼろげながら覚えている。素人のど自慢の番組中、強壯剤のアンブルを飲む生コマーシャルとともに毎回一曲唄うのだが、すばらしい声で何か師範代のような役割だった。でも一番の思い出は、やはり彼が世に出るきっかけとなった昭和三十七年番組開始の「てなもんや三度笠」である。この放送が日曜日の午後六時からで、それが終わると六時半からの「シャボン玉ホリデー」にチャンネルを切り替える、というのが当時の子供たちの定番だったのではないだろうか。その後三年ほどの雌伏期間を経たのち、必殺シリーズの中村主人役で揺るがぬ地位を築いた。コメディからシリアスに転じて大スターになったという点では、森繁久彌氏に似たコースを辿ったと言えよう。

今回の「明日への遺言」は、監督のオファーがあってから実に半年間辞退し続けた末の出演だったというが、まさに迫真の演技であった。特に、ラスト近くで絞首台に向かう主人公の後ろ姿を撮ったシーンでは、映画完成後に藤田さんが「この役柄の重さを考えたら、最初は断ろうと思っていた。でも引き受けて良かった。この役で私は俳優として昇天できたのだから」と言い、また監督も「あのシーンでは岡田中将が乗り移ったように見えた」との感想を述べているくらいである。藤田さんは何年か前から病気を抱えながらの出演だったが、まだまだあの渋い演技を私たちにを見せてくれるものと思っていた。それだけに、このたびの急逝は残念でならない。ご冥福を心からお祈りするものである。(H22.2記)



太平洋戦争開戦の年に生まれて

健康コース 伊藤 盛夫

山梨県中巨摩郡玉幡村（現甲斐市）で昭和16年7月8日生まれ育ち、高校卒業まで過ごしました。昭和16年12月8日日本海軍が真珠湾を攻撃して太平洋戦争が開戦されると父母・雑誌・新聞等から聞いたり見たりして知りました。昭和20年8月の終戦までの幼いころの思い出は、空襲に備えて、裏の竹やぶに防空壕を掘って非難、庭にバケツに水を入れて並べ火災に備え、家の白壁は墨を塗って隠した事。又、学校、商店、大きな土蔵があるところは攻撃目標になり、事実倉庫が火災で燃えているのを隣家の門前でみていたのをはっきりと脳裏に焼き付いています。

昭和24～5年頃、小学校からの帰りに川の中に葉莖が落ちているのを拾ったこと、田圃に焼夷弾が投下され大きな穴があいていたこと、中学校のそばの飛行場跡地で遊んだことなど。食糧は家に田畑が多少あったので米、野菜、イモ類を食べていましたがキビ、ソバ、綿なども作っていたのを覚えています。魚は静岡からの行商が来て、母がコメなどと交換していました。父の兄弟は6人で（男3人女3人）。男3人は皆外地で戦争を経験しています、私の父は長男の為、家の跡を継ぐことになっていました（現在は民法による）父は戦争中に上官の厳しい訓練の為体調を崩し、帰国後も病院の入退院を繰り返していましたが、母と私たち幼い4人を残して帰らぬ人となりました。母方の兄弟が大変心配して、当時横浜に丁稚奉公していた次男を漸く説得して母と私たち子供の面倒を見ることになりました。母と次男の苦労は計り知れません。これに似たようなケースは彼方此方にあったようです。

戦後日本経済が目覚ましい発展を遂げ、物心両面において豊かになりました。平和と繁栄を享受している私たちはここまで復興出来たのは国家の為に戦争で戦った多くの軍人と英霊、これを支えた人々の礎を決して忘れてはならないし、戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぎ、議論を尽くし、正しく次の世代に引き継がなければならないと思います。

※甲府空襲は、太平洋戦争末期の1945年7月6日～7月7日の間に、アメリカ軍爆撃機B-29によって山梨県甲府市を中心とした都市が受けた空襲である。空襲を受けたのが7月6日の深夜から7月7日にかけてであったため、「たなばた空襲」とも呼ばれる。

被害人口は86,913人、そのうち死者1127名。



戦後70年の思い出

まちづくりコース
瀧澤 正高

戦後生まれの私（団塊の世代）は、戦争の状況は解りません。只、小さい頃は食糧難で多少の空腹感の記憶はあります。小学生の時、「原爆」の映画を観賞して少女が鼻から血を流し、白血病で亡くなる姿がいまでも印象に残っています。その時、戦争の恐ろしさを感じました。

高校2年生（1966年）の時、インターアクトクラブに所属して、沖縄がまだ返還されず、パスポート（身分証明書）を持って那覇港に着いた。沖縄の高校生と懇談したり、「ひめゆりの塔」・「健児の塔」や「洞窟」などを一緒に見学して、戦争の傷跡が深く心に残りました。那覇港の埠頭に米軍の車両を見ると戦争に負けた悔しさと共に平和がいかに大事であるかを痛感しました。

専科一期の関利雄さん（91歳）と同じクラスメートになり大宮の市民会館で関さんの「戦場体験」を聞き、戦争の悲惨さや平和の尊さを学びました。最近の集団的自衛権など憲法の解釈を捻じ曲げて危ない方向に舵を切ろうとしています。多大な犠牲を払った戦争の教訓を忘れずに二度と戦争をしては成らないと思います。平和国家を維持する事がいかに大切であるか、子や孫に安心した環境を残すのが私達の責務と思います。

※大けがを負った子ども S20.8.6原爆投下～同年12月末まで死亡者推計14万人

8月7日～20日撮影／陸軍船舶司令部写真班

提供／広島原爆障害対策協議会



8月7日～8月20日

撮影／尾糠 政美

提供／広島原爆障害対策協議会

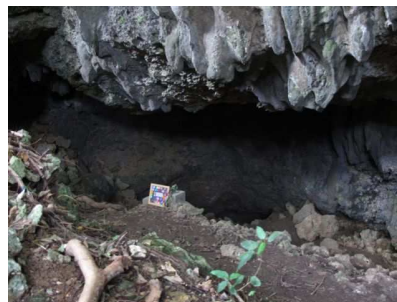
※沖縄戦争慰霊碑

日本 188,136人（沖縄県出身

者 122,228人（一般人

94,000人、軍人・軍属 28,228人）・

（他都道府県出身兵 65,908人



戦争について思うこと

まちづくりコース
大森 勇

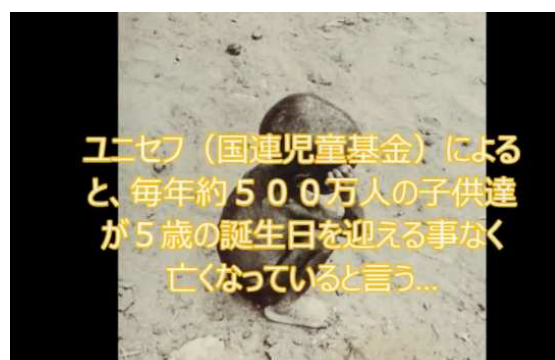
昭和16年12月8日、日本がハワイ真珠湾を攻撃し第二次太平洋戦争が始まった年の8月に私は生まれました。終戦は4歳の時でした。戦後派に当たるのでしょうか。

私は昭和の大合併を経て、平成の大合併により今は鹿沼市に合併されましたが、当時は清洲村という長閑な山村に生まれ育ちました。生家は農家で地元では一応名の通った旧家でした。しかし農地解放により田畑は没収されました。我が家は祖父母を含め大家族だったため家計は火の車だったようです。米はほとんど供出してしまい一家の食糧は麦飯にサツマ芋、里芋、ジャガイモ、など炊き込んだものでした。親父がしみじみ話していたそうです。「百姓がコメの配給を受けるなんて」と。情けなかったのでしょうか。そんなこともあり私は今でも特にサツマ芋には手が出ません。それでも疎開してきた人たちや非農家の人たちに比べれば良いほうだったようです。

もう一つの記憶は私が3歳の後半ころだと思います。たまたま風邪のためか熱を出して母屋で寝ていました。祖母が添い寝をしてくれていました。終戦まじかのことと思いますが、太田飛行場(群馬県)が爆撃を受けた時の事です。爆撃機による振動なのか爆弾の破裂したことによる振動なのか分かりませんが突然障子が鳴り出しました。祖母はびっくりして私を抱きかかえ土蔵に逃げ込みました。そのあとの記憶はないのですが、なぜかそのことだけを鮮明に覚えています。

戦争の悲惨さ、むごさについては既に生々しい記録があり、語り継がれております。沖縄、広島、長崎然り、東京はじめ都市部の爆撃による戦災の悲惨さは、私たち田舎育ちの、そして物心ついたときには終戦を迎えていた私には想像もつきません。いま国会ではいろいろと我が国の自衛権について議論されております。難しいことはわかりませんが隣国の脅威に対抗してのことだと思います。しかしひとたび戦争が起これば、勝敗に関係なく当事国の国民は塗炭の苦しみを受ける事明らかです。国の指導者たちが本当に国の平和を考え、国民のためを思えば、そしてお互いに他国の国民を思いやる心があれば戦争は起こらないはずです。国の指導者が自分の権力を誇示し、欲望を満たそうとする気持ちが、軍備に多くの税金を費やし、戦力を拡大し、危険な兵器づくりに奔走して戦争に走るのです。

世界人口72億人の一部を除いて、食糧が足りなく、医療が行き届かず、人々が生命の危機にさらされています。教育が受けられず能力がありながらその能力を発揮できずにいる人も数多くいます。財政が貧しく国民の貧困に手がまわらない国もあります。各国の軍事費の一部を民政に回すならば多くの人の命が救われ、教育が受けられるはずです。発展途上国の子供たちの命を救うことが出来るのです。戦争の抑止と言いながら、お互いに際限なく軍事力の拡大を図っています。軍事力の拡大が本当に戦争の抑止につながるのでしょうか。今や世界は一つです。戦争に勝利しても国民は絶対に幸せにはなりません。



ユニセフ(国連児童基金)によると、毎年約500万人の子供達が5歳の誕生日を迎える事なく亡くなっていると言う...

何時になったら戦争の無い平和な世界が来るのでしょうか？

郷土コース 浅見 法子

「みんなの広場で戦後70年平和祈念を特集しますご協力を！」ということで原稿依頼のお話を頂きましたが、戦後生まれの私は、戦争の思い出も無く、唯、戦争の酷さ、恐ろしさを映像や経験者の話を通して感じるだけで実感が余りありません。



女性、母親の立場で考える時、夫や息子をどんなに辛い想いで戦地に送り出したのかと思うと、胸が熱くなります。



世界ではあちこちから戦争の無残な映像を目にしますが、何時になったら戦争の無い平和な世界が来るのでしょうか？

皆さん、個々では私と同じ事を思っているのに、何故こんな醜い戦争が起こってしまうのでしょうか？ 私はこんな事しか考えられません。

戦後70年の経過について

まちづくりコース
伊藤 登

私は山形県米沢市の山奥に生まれ、終戦後当時5歳であり、私の生地は硫黄鉱石を運ぶ、山中の硫黄鉱山から奥羽本線関根駅まで（約200キロ）索道（空中ケーブル）の中間操車場で、その中間操車場を昭和20年8月？日ですが、米軍爆弾投下され私は5歳時に家の障子窓が「バリバリ」との音で、母親にすがりつき、今70年過ぎても脳裏に焼ついています。昭和20年終戦直後、「進駐軍」のジープが猛スピードで村中を走り回っていたことを、5歳の時の事を思い出せます。

米軍は怪しい場所は、徹底的に攻撃するよう、最近のテレビで放送されていました。私は学校卒業後、鉄道関係に就職し、40数年勤務し、退職後長い間お世話になった恩返しとして、大宮鉄道博物館でボランティア活動しています。本年4月12日まではヒストリーゾーンの中央の転車台に蒸気機関車でC57型135号が、12時と15時に「汽笛吹鳴」にてサービスしていましたが、4月12日より昭和11年に日立製作所で3両製造された、その1両で電気機関車「EF55型1号」で、主に東海道本線で「つばめ」等特急列車を牽引している最中、昭和20年8月3日米軍機より電気機関車に「EF55型1号」に16発の銃撃を受け現在転車台の電気機関車「EF55型1号」に銃撃の修理跡が残っています。電気機関車「EF55型1号」にて汽笛吹鳴サービスは行って居ます。専科1期校友会の皆様、大宮鉄道博物館に行き、戦後70年の銃撃を打てた機関車「EF55型1号」見て頂ければ幸いです。戦争のない世界を祈って乱筆乱文にて終わらせて頂きます。



残された出征の一枚の写真

郷土コース 岡村 昭則

今年には戦後70年という節目の年である。そこで専科一期校友会HPの「みんなの広場」で戦後70年平和祈念集作成を発案し、作成一切を引き受けた私として、自分は何を書くかと思ひめぐらし、10年前の節目の時のエッセイと5月に訪れた広島原爆記念公園の紀行を添えて掲載すること一件落着となった。ところが皆さんから投稿されるのは文書のみが多く写真がないことから、読む側にすれば流し読みになってしまう。写真があるとそれに引きつられてじっくりと読んでくれる。だから写真一枚で読む側の脳裏に焼き付く度合いが違っているのである。そこで私は投稿文を読んで、それに相応しいインターネットで無料公開されている写真の中から探し出して文書に添えていく。

人が写っているものはプライバシーの問題から使わないことにしているが、今回、投稿文の中に、親や妻が子供や夫を戦場に送り出す思いはいかばかりというくだりがある。インターネットで公開されている出征の写真には必ず個人名の幟が立っているものが多く、どうしようかと思ひ巡らしていた時に、閃いたのは私の母が亡くなった時に引き継いだアルバムの中にある、父の弟である巖おじさんの出征の写真だった。アルバムを探し出してその写真を見つけスキャンして利用させてもらい投稿文に貼り付けた。



★私自身、巖おじさんの写真と向き合うのは初めてである。それに母が亡くなった時に父方の改制原戸籍の交付を受けていたことを思いだしたので、今回初めて巖おじさんの写真と戸籍を読み合わせることにした。巖おじさんとは身延に疎開する前に住んでいた淀橋区＝今の新宿区＝の家で何回か会っただけだが、これまで巖おじさんのことは父より聞いていたのは、「新宿の淀橋消防署に勤め消防自動車を運転していたこと。飛行機以外はすべて運

転できる技術者であったことから満州に出兵し、自動車、戦車も動かし、最後は南方への輸送船の機関士と徴用され、米軍の飛行機に撃沈されて海の藻屑と消えたこと。届いた遺骨箱には一片の紙切れだけが入っていたこと」等である。父の兄からは「南方の海で助けてと叫ぶ巖ちゃんが夢の中に現れた」と私に話してくれたことも蘇ってきた。

★今から10年前に、父の親・兄弟・姉妹は120年ですべて死に絶えたことからプラバシーを抜きにして、70年ぶりに叔父さんの写真と向き合いながら改制原戸籍を読み解いていく。「巖おじさんは大正7年12月生まれで、昭和20年8月30日ミンドロ島に於

いて戦死している。」、巖おじさんが出征したのは昭和18年の

春であるから25歳で出征し2年後に戦死したことになる。戸籍を見て気になったのは、終戦は昭和天皇による玉音放送により、日本の降伏が国民に公表された日は、昭和20年8月15日

であるから、巖おじさんは終戦後の昭和20年8月30日に戦死したと戸籍には記録されている。このずれは何かとインターネットで調べてみると、沖縄戦終結の日は9月7日としているように、1945年8月15日、大本営は陸海軍に対して「別に命令するまで各々の現任務を続行すべし」と命令し、8月16日に自衛の為の戦闘行動以外の戦闘行動を停止するように命令した。さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。

さらに8月18日には、全面的な戦闘行動の停止は、別に指定する日時以降に行うように命令、8月19日に、第一総軍・第二総軍・航空総軍に対して、8月22日零時以降、全面的に戦闘行動を停止するように命令。支那派遣軍を除く南方軍等の外地軍に対しては、8月22日に、8月25日零時以降に全面的な戦闘行動停止を命令。また戦闘停止命令の届かなかった部隊等による連合軍との小規模な戦闘は続いたという。これらの戦闘は8月下旬になると概ね終結したという。本部から戦闘地域までは敗戦命令が届くまでの間に戦死という悲劇が生まれていたのであろうと推測する。不運だったと言わざるを得ないが、戸籍にかかれていることが本当かどうか疑わしいと思った。ミンドロ島の海底のどこかに巖おじさんの乗っていた輸送船が時空を超えて横たわっているに違いない。戦争とは残酷なものよ。時がすべてを消し去って、船に乗っていた人の存在さえ忘却の彼方へと押し流してしまった。現在は風光明媚なリゾート観光地で70年前の戦争のことなど気に掛ける人もいないに違いない。



★ミンドロ島の戦いは、太平洋戦争中の1944年12月13日から2月下旬にかけて、日本軍とアメリカ軍により、フィリピン北部のミンドロ島で行われた戦闘である。太平洋戦争中は日本軍が占領していたが、1944年12月15日にアメリカ軍はルソン島奪回の足がかりにミンドロ島へ上陸を敢行、島は戦場と化した。アメリカ軍の作戦目的は、ルソン島の戦いの準備として作戦拠点を確保すること及び全フィリピン諸島を日本軍から解放する一環としてのミンドロ島自体の奪還にあった。圧倒的に優勢なアメリカ軍の攻撃により、日本軍守備隊は全滅している。

★父方の従兄の中で巖おじさんのことを知っている人は、今は誰もいない。私が僅かでも巖おじさんの存在を戦後70年ぶりに、叔父さんの写真を通して日の目を見るに至ったことは巖おじさんの供養にもなり、嬉しい限りだ。(H27.7.11記)

「郷土コースの戦後70年平和祈念集作成応援合唱」

7月10日、専科一期校友会第6回目の交流事業「暑気払い」を昨年同様に大宮サンパレスホテルで開催しました。アトラクションのカラオケでは、私が戦後70年平和祈念集の作成を発案し引き受けていることから、郷土コースでは応援歌として北氏さんが熊谷空襲のお話をされ、選曲してくれた「戦争を知らない子どもたち」を参加者全員で合唱しました。



戦争が終わって	僕等は生れた
戦争を知らずに	僕等は育った
おとなになって	歩き始める
平和の歌を	くちずさみながら
僕等の名前を	覚えてほしい
戦争を知らない	子供たちさ

若すぎるからと	許されないなら
髪の毛が長いと	許されないなら
今の私に	残っているのは
涙をこらえて	歌うことだけさ
僕等の名前を	覚えてほしい
戦争を知らない	子供たちさ

青空が好きで 花びらが好きで
いつでも笑顔の すてきな人なら
誰でも一緒に 歩いてゆこうよ
きれいな夕日が 輝く小道を
僕等の名前を 覚えてほしい
戦争を知らない 子供たちさ
戦争を知らない 子供たちさ

※下の下線を、コントロールキーを押しながらクリックすると、杉田次郎の動画が見られます。

<https://www.youtube.com/watch?v=Tm1KUgF3c5Y>



ウィキペディアより

※「戦争を知らない子供たち」の解説

「戦争を知らない子供たち」は、1970年に発表された、ジローズ（第二次）のヒット曲。作詞は北山修、作曲は杉田二郎。

1971年2月5日にレコードが発売されるとオリコンチャート最高11位、累計で30万枚以上^[1]を売り上げるヒット曲となった。ジローズはこの年の第13回日本レコード大賞新人賞を、北山修は作詞賞を受賞した。1972年公開の映画『地球攻撃命令 ゴジラ対ガイガン』では挿入曲として流れ、1973年には、この曲の歌詞を原案にした同名の映画が制作された世はベトナム戦争の真っ最中であり（武力衝突開始1960年、終結は1975年。なお不正規戦争で宣戦も講和もない）、憲法の制約のある日本政府もアメリカ合衆国の戦争遂行に基地の提供といった形で協力していた。日本国内でも、一部の文化人や学生を中心に、反戦平和運動は盛り上がりを見せていた。そのような中で発表されたこの曲は、日本における代表的な反戦歌となった。

日本は戦争してはいけない

郷土コース 梅田 博

昭和14年1月1日に浦和市で生まれた私は、昭和19年9月、埼玉県北葛飾郡静村の母の実家へ疎開しました。その疎開先には、名古屋市に住む母の姉の一家がすでに疎開していました。私たち一家は、一家6人で6畳の居間と3畳の台所があるだけの別棟の隠居部屋に住みました。食べ物が極端に不足していて、麦飯か又はサツマイモ、ジャガイモ、カボチャなどが主食でいつも空腹でした。疎開した翌年、昭和20年4月に静国民小学校へ入学しました。当時のことは断片的にしか覚えていませんが、校門に厳めしく竹槍を持った6年生が立っていました。また、竹槍を持った上級生が藁人形を突いていました。下校時に飛行機の音がすると、麦畑へ逃げ込みました。家の電灯は灯りが漏れるといけないというので、黒い布で覆っていました。食糧不足を補うために、学校へ行く途中の川の岸辺に野菜を作っていました。



昭和20年8月15日の終戦の日は良く晴れた暑い日で父に連れられて、

加須市の父の実家へお盆参りに歩いて行きました。終戦の詔勅のラジオ放送は、歩いている途中にあったのだと思います。父の実家では、従兄弟が兵隊として満州へ行っていたので、表向きには悲しんでいましたが、生きて帰って来られると内心喜んでいたと思います。実際には、シベリアに抑留されて塗炭の苦しみを舐めて、3年後に帰って来ました。終戦



後、教科書が黒塗りにするところが多くあり、子供ながら戦争に負けたんだなと実感しました。学校に男の教師は一人か二人しか居ず、代用教員の女教師がほとんどでした。食糧不足は相変わらずで、麦飯にサツマイモやジャガイモを細かく刻んで混ぜて炊いたものが主食でした。

小学校3年生の時、カスリン台風により大利根村で利根川が決壊して、静村もすっぽり水没してしまいました。たまたま疎開先に水塚があったので、そこに逃げることで

きて、九死に一生を得ました。

その後日本は朝鮮特需などがあり、急速に経済を中心に復興して、世界有数の経済国になりました。自衛隊を有してはいましたが、不戦の憲法を持つ国として、戦後70年、戦争の全くない平和国家になったことは、世界に誇っていいことだと思います。しかしながら、現政権は今国会で安全保障関連法を成立させて、集団自衛権の行使を容認しようとしています。おそらく数で優位な自民党・公明党により、可決成立することは必至です。戦後70年、今まで、近隣国はもちろん世界のどこの国とも戦争をして来なかつた日本ですが、戦争する国へと転換してしまうのが、とても残念です。これからの子孫のためにも、日本は平和国家として、国民を守ってもらいたいと思います。

戦争の傷跡、そして平和を願

健康コース 新井 貞男

私は終戦の年は2歳になったばかりで、戦争の記憶は全くありませんが、私の父と父の弟（叔父）2人は、相前後して軍隊に入隊、戦地にも行ったそうです。父とすぐ下の弟は何とか帰還しましたが、一番下の弟は戦死してしまいました。戦死した叔父の軍服姿の遺影は、実家に行くと今でも和室の壁の上部に掲げられています。



母や姉たちから聞かされた話ですが、戦死の報に接した時の祖父や祖母の悲しみは筆舌に表わし難いものがあったといいます。

一時期、祖父は何も手に取ることも出来ず、茫然自失…夢遊病者のようだったと…。

戦死した叔父は、周囲から好かれる機智に富んだ将来を嘱望されていた人物で、祖父・祖母自慢の息子だったそうです。それだけに祖父の悲しみは途轍もなく大きかった…と、容易に想像出来るのです…。

又、祖母は元々体が丈夫でなかったこともあって、痩せ細り、何も口にできないほど憔悴し切っていた状態が何カ月も続いていたというのです。この祖母に、私は非常に可愛がられた記憶が臍気にですが、残っています。幼い私は、祖母と一緒にいつもお膳を囲んで食事していたようです。祖母が外に出掛けようものなら、戻ってくるまでいつまでも食事をしないで、待っていたそうです。

そんな祖母も、息子の戦死という現実を突き付けられ、精神的な苦痛に耐えられなかったのかその後病気がちとなり、70歳になる前に亡くなってしまいました。その当座、未だ状況を理解し切れていない私は、『おばあちゃんと一緒じゃないと…ご飯は食べない』と言い張って箸もとらずに食事を拒否…、両親を困らせていたそうです。この話は、私が中学生くらいになってから、母や姉たちから何度となく聴かされました。

わが国の太平洋戦争の戦死者は、軍人だけで約230万人と伝えられているが、家族や親戚、その関係者を含めると、実際にはその数十倍かの不幸かつ悲惨な実態があったのではないのでしょうか。“背筋がぞっとする”思いがいたします。



現在の私は、時々、孫と一緒に食卓を囲むのを楽しみにしていますが、こんなどこにでもある普通の風景がいつの時代にも、どこの家庭でも見られることを願わずにはられません。

戦後70年続いた平和な社会がいつまでも続くように、私達は機会ある毎に一緒に声を挙げていこうではありませんか。

終戦の年に日本に帰る

郷土コース 有村 弘

私が生まれたのは、戦争が勃発する年の1941年3月である。親父は明治の生まれで、10歳の時に祖父が亡くなったので、中学を卒業と同時に、朝鮮の京城教員養成所を卒業後、長年小学校の教員をしていた。終戦時は慶州郡役場の責任ある立場にあったと聞いている。日本から離れていたこともあり私には戦争の覚えがない。寧ろ、終戦後の内地への引揚のことを臆ではあるが、ところどころ覚えている。ぼんぼんと云う音や、暗闇の中の大声、港の船、汽車の中で痛かったことなどである。後で聞いた話では、3家族がやっと乗れる程の漁船に、手荷物1個ずつを持たされ、1945年10月17日、浦項を出港、暗闇の海で釣れた数少ない魚を食べながら、翌朝やっと山口県仙崎港に到着して内地の土を踏んだ。父母や祖母、兄、姉の喜びようはいかばかりだったのだろうか。

仙崎の港では1週間ほど滞在を余儀なくされたが、親父は、ここから、鹿児島に帰る長い交通の便などを思い、大変難儀をしたそうである。とりあえず、家族9人、門司駅まで出ることに奔走した。この滞在の期間中、港で停泊している漁船を見て遊んだのを微かに覚えている。殆どは、祖母の背中で寝ていたのである。やっと、門司駅で汽車に乗ることが出来たが混雑のあまり身動きできず目を覚ましたのを臆げに覚えている。窓から引きずり込んで乗車す



ほどの込みようだったと聞いている。鹿児島の駅に到着したのは、10月29日の夕方薄暗くなっていたが、駅の一部や駅前帯は瓦礫が散乱して、錦江湾まで見通せるほど惨憺たる状況だったそうである。焼け残った家の前だけが片づけられた中、祖母の実家を頼りにして、仮住まい出来たことをことのほか喜んだそうだ。51歳になっていた親父は、15歳を頭に下は1歳の弟を育てるためどんなに気の遠くなる思いであっただろう。只々、父母と祖母に頭を垂れるだけである。

小学校では一時期、中学校区域の人数が集まったため、低学年は午前、高学年は午後と二部授業となり、給食の食器や惣菜がなく、家からお椀に入れた惣菜を給食室で渡して教室に行ったことなど、何もかもが貧しかったと思っている。

中学校では、大分良くなったとはいえ、1学年50名以上が10~13教室に詰められた学校生活だったので、本を開いた記憶がない。

1,959年高校卒業と同時に東京に出て来て生活してきたが、亡き親の有り難さ、周りの友達に支えられて歩んで来たことを深く感じている。

終わりに、今があるのは、戦争によってはからずも命を亡くされた多くの方々の、貴い犠牲の上に築かれたことを忘れてはならない。そして、戦争は二度と繰り返してはならないと肝に銘じている。

祖父を顧みて平和を願わずにはいられない

まちづくりコース

蔦川 忠義

私の祖父は1903年（明治36年）28歳の時、岡山県の片田舎から一旗揚げてくると、単身移民として米国シアトルに行き、カナダ国境付近の材木を日本に輸出する材木商を始めました。軌道に乗ると日本から兄弟を呼び集め、食料品の輸出入等で成功しました。私の父は9人兄弟の長男ですが全員アメリカで生まれ、旧制中学入学時になると日本に帰って教育を受けていました。戦争が激しくなると皆日本人キャンプに収容されました。



私も叔父や従兄弟が収容されていたアイダホ州ミニドカの日本人キャンプを2005年8月に訪ねました。当時の町からは100マイル以上離れた、川で囲まれた三角州の土地にあり逃亡などとてもできない荒涼とした場所でした。キャンプでは日本人の間で勝ち組、負け組での争いもあり、叔父の一人は勝ち組の先導をしたため、敵性外国人で日本に強制送還された。当時は日米の捕虜交換の員数に入れて送還されたそうです。祖父は、昭和18年頃財産は全てアメリカに没収され、無一文で家族を引き連れて岡山に帰って来ました。私の叔母の話では、郷里の女学校（戦後新制高校となり私も卒業生）に入るとアメリカ帰りの敵性教育を受けた者として、教師からも酷いいじめを受け辛かった。ところが終戦の夏休み8月末頃教頭が血相変えて家に来て、「蔦川！明日進駐軍が学校に検閲に来る。お前が通

訳と対応をしろ、とのこと。当日、進駐軍もまさか岡山の片田舎の女学校に英語ペラペラの生徒がいるとはビックリ、OKOK で無事に済んだ。それまでの劣等生が一転卒業時には優等生で表彰されたが、全くご都合主義もいいところと笑っていました。戦争に翻弄された当時の様子が分かる様な話ですが、笑い話ではありません。



さて、今回の安保関連法案問題は先の衆議院選挙で自民が圧勝したことにあり、その結果が思い上がりの権力志向を招くと云うことです。今見えるものしか見えない私も平和を守ると云うことが何か、何をすべきか考えさせられます。

※編集人より 米国・日系人収容所の歴史から現在を問う＝2007年ミニドカ強制収容所メモリアル巡礼記 「北米報知」記者 佐々木 志峰のブログをどうぞコントロールキーを押しながら クリックしてください。

<http://kaze.shinshomap.info/special/07/01.html>

人生のプロローグ

郷土コース 岡田 時雄

昭和 16 年 6 月 10 日、戦争の始まる直前に生まれた自分は、戦争が人生のプロローグになった。

私は、横浜の中区という中心街に広告のチラシ等デザイナーを営んでいた家に生まれた。祖父母と両親と姉の 6 人家族であった。戦争がはじまりしばらくして、父は結核を患い昭和 19 年 11 月 26 日他界した。

働き手を失い生活が出来なくなり、3 か月ぐらい後に 4～5 キロ離れた横浜の南区の丘の麓にある木工所に、留守番を兼ねた住み込みで母が働くことになった。祖父母は引っ越さずに残った。

母がリヤカーに茶箆筒一つと子ども二人を乗せて行った引っ越しの記憶が、自分の一番古い記憶だった。そのすぐ後の昭和 20 年 5 月 29 日に横浜大空襲すなわち前に住んでいた辺りが大空襲に遭った。その日は、丘の洞穴の防空壕で横浜の中心街の方を見ていた。B 2 9 がたくさん飛んで来て爆弾を落とし、火は見えなかったがその方角は真っ赤になっていた。幸い、私たち近辺には爆弾は一つも落ちてこなかった。自分は、事の重大性が分かっていなかったが、母が心配そうに見ていたのを覚えている。

その何日か後に母が私を背負って焼跡を見に行った。辺りは真っ黒で、いたるところにトタン板があった。母はそのトタン板を一つずつ捲っていた。その下には焼死体があった。祖父母を探していたのだろう。全てが黒い感じで顔の表情などは分からなかったというか正視でき無かったのかもしれない。ただただ、恐ろしくて母の背中で泣いていたのを覚えている。生きながらにして自分の体が焼けていく恐怖を体験した顔を、もし鮮明に覚えていたとしたら少し生き方が変わっていたのかもしれない。

父がほんの少し長く生きていたら、私達親子は同じ運命をたどったことを考えると、幸運ではあったが、その後の生活は大変だった。母の生家は貧しく子供が大勢のため家業の豆腐屋の手伝いと弟や妹の世話で忙しく、全く学校に行っていなかった。従って文字を書くことが全く出来なかった。そんな中での母の子育ては、昼間は裁縫でお金を稼ぎ、夜は飲食店で働き、休む暇はなかった。

その後、勤めていた飲食店を首になったり、母が大病をして数か月働けなくなったり、食べていけなくなるというピンチはいろいろあった。どうすることもできない自分にとって、その間はとても長く感じた。しかし、その度に幸運が訪れ生活が改善され、人並みの生活をさせて貰ったと今は亡き母に感謝している。

先日、テレビで紹介された与謝蕪村の句で私の投稿文は終わりにします。

「遅き日のつもりで遠きむかしかな」

完



<大空襲直後の伊勢佐木町付近>

ウィキペディアより

※**横浜大空襲**は、1945年5月29日の昼間に米軍によって横浜市中心地域に対して行われた無差別爆撃である。B-29爆撃機517機・P-51戦闘機101機による焼夷弾攻撃で約8千～1万名の死者を出した。

★工業地、商業地、住宅地及びこれらの混在地が、焼夷弾攻撃でどのように燃えていくかのデータを、当時の米軍は得ておらず、当空襲は、そのデータ収集のための実験的攻撃であった。燃えやすい木造住宅の密集地を事前に綿密に調べ上げ、焼夷弾で狙い撃ちにする作戦だったことが、米軍資料を分析した日本人研究者によって明らかにされた。最初から非戦闘員を狙った住民標的爆撃であり、それは東京や大阪など他都市の空襲にも通じるという。

★米軍は、攻撃目標を東神奈川駅、平沼橋、横浜市役所、日枝神社、大鳥国民学校の5ヶ所に定めて襲撃し、特に被害が甚大だったのは、現在の神奈川区反町、保土ヶ谷区星川町、南区真金町地区一帯とされている。これらのうち星川町が攻撃を受けたのは被服廠があったからである。また横浜市立大鳥小学校は焼け残り、この小学校は戦後、自殺を図った東條英機元首相を収容した病院となった。京浜急行電鉄黄金町駅周辺一帯は、東急湘南線の上下線に停車中の電車から空襲警報発令と共に退避中の利用客も被害に遭遇し、多数の焼死体が累々と折り重なった所である。また同線の平沼駅は前年に廃駅となっていたが、焼夷弾によって壊滅的被害を受け、その鉄骨が1999年まで架線柱代わりに残されていた。建立中だった護国神社（現三ツ沢公園）も本殿などすべてを焼失した。

★白昼の空襲であったことから、第三〇二海軍航空隊（厚木海軍飛行場駐在）の零戦と雷電や、第十飛行師団（天翔）の屠龍・鐘馗などの戦闘機、高射第一師団（晴兵团）の八八式7.5cm野戦高射砲の活躍でB-29を7機撃墜、175機に損害を与えた。

母から戦時中の体験を聞きました！

まちづくりコース

久保田 圭子

私は戦後生まれなので戦時中のことは勿論、戦後の復興の大変な時期のことも記憶がありません。ひもじい思いをした記憶もなく幼稚園に通い、小学校に入学しました。というわけで投稿するのは無理かと思っていましたが、親から聞いた話でも良いとのことでしたので投稿させて頂くことにしました。

私の母は大正10年生まれでこの5月に満94歳を迎えました。身体は歳相応に衰えてきてはいますが、それでも身の回りのことは勿論、お金の管理、炊事洗濯などの家事もこなしています。頭は非常にしっかりしていて記憶力も確かです。その母から戦時中の体験を聞きました。

母は新宿の柏木（淀橋水道場があるあたり）に祖父の代から住んでいました。昭和20年5月25日の20時頃に新宿一帯を含む大空襲があったそうです。空襲があった場合の避難場所が決められていましたが、普段は単機のB29の空襲などでは避難しないで自宅の防空壕に隠れていたようです。ただ下町の大空襲が3月にあったばかりだったこともあり、その日の空襲は今までと違って大編成のB29が次々と飛来し焼夷弾が花火のように落ちてくるので、皆決められていた避難場所に大急ぎで向かったそうです。たまたま家にいた母の兄（私の伯父）が、「避難場所に行ったらかえって危ないので既に空襲で焼けてしまったあたりに避難した方がよい」と家族を説得し、母の家族だけが他の人たちと別れて反対方向に向かったとのことでした。その結果その避難場所が攻撃の対象となり、そこに居た人たちは重なり合ってほぼ全員が亡くなってしまったとのことでした。

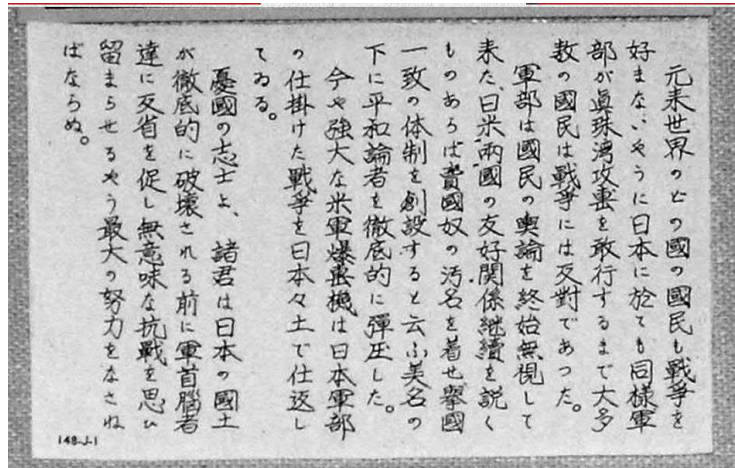
もし母がそこに避難していれば私は生まれなかったというわけです。母たちは焼け残った塙の陰に隠れていたそうですが、その塙が火のように熱くなっていて火傷をしそうなほどひどい空襲だったと言っていました。自宅のあったところはあとかたもなく、あたり一帯見渡す限りの焼野原となり新宿の伊勢丹の残骸が残っているのが見えたそうです。



死体がごろごろ転がっており、最初は見るときにきやあきやあ言っていたものが次第に平気になり慣れとは恐ろしいと母が言っていました。東京薬学専門学校が残されていたのでそこに避難し、新宿に住むのは諦めて高円寺に居を構える決心をしました。

母は戦後70年たった今でも、どうしてあんな戦争をしたのだろうか？

どうして優秀な若い人たちをむざむざ戦地に行かせ死なせたのだろうか？



という疑問が拭いきれないと言っています。終戦近くなってからは国民全員が白米などは食べられず、配給で配られるひとにぎりの米にジャガイモやさつまいもを混ぜて水で薄めて食べたそうです。ですから母はいまでもすいとんが大嫌いです。戦時中食傷したそうです。

母は安倍首相がまた軍国への道を歩むのではないかと危惧してい

ます。安保法制案が与党の大多数で決められることに不安があるようです。こういう実体験をした人たちはどんどんいなくなります。彼らの貴重な意見を軽視することなく耳を傾ける姿勢と徹底した安保の議論を是非国会でやって頂きたいと願っています。

ウィキペディアより

※**東京大空襲**は、第二次世界大戦末期にアメリカ軍により行われた、東京に対する焼夷弾を用いた大規模な戦略爆撃の総称。日本各地に対する日本本土空襲、アメリカ軍による広島・長崎に対する原爆投下、沖縄戦と並んで、都市部を標的とした無差別爆撃によって民間人に大きな被害を与えた。空襲としては史上最大規模の大量虐殺とされる。東京は1944年（昭和19年）11月14日以降に106回もの空襲を受けたが、特に1945年（昭和20年）3月10日、4月13日、4月15日、5月24日未明、5月25日-26日の5回は大規模だった。その中でも「東京大空襲」と言った場合、**死者数が10万人以上と著しく多い**。1945年3月10日の空襲を指すことが多い。この3月10日の空襲だけでも罹災者は100万人を超えた。

大東京空襲被災地図



戦死の父、熊谷空襲、そして今思う事

郷土コース 北氏 和雄

41年間働いた会社の入社試験では、学科試験に加えて作文も書かされた。テーマは『私のお父さん』と言うもの。私が物心付いた頃には既に父親はいなかった。母からは「お父さんはね、戦争で死んだのよ。」と言いながら昔の写真を見せてくれて「あなたはね、ここ。おじいちゃんの膝に乗っているのが貴方なのよ。」と説明をしてくれた。まだ小さかった私には、この写真に写っている家族には記憶が無い。当時狭い部屋の中の一角には父と祖父の写真が掲げられており、父は勇ましい軍服姿で写っていた。しかしそれは写真だけであり、“父親”と言う“もの”の感覚は解らないまま育ったわけである。世間では父親、母親、そして兄弟（姉妹）、それに時には祖父母も含めての家族が標準であったが、私の家族は母親と兄、そして祖母の4人家族の生活であった。時々出かけた際に父親を相手にキャッチボールをしている、父親の腕にぶら下がりをしている子供達を見ると、少し羨ましくも思ったが幼少の頃には母が父親の代役であった。部屋の片隅の仏壇には三つの位牌が収まっていて、真ん中が父親、右が祖父、左が父の前妻のものであった。子供の頃は無意識のまま位牌に手を合わせていた。

父のことを母に尋ねると言葉少なげに話してくれた。位牌には『昭和19年7月』と命日が記されていたが母は「貴方のお父さんはね、先の太平洋戦争で死んだのよ。乗っていた輸送船が米軍の魚雷によって沈められて亡くなったの。当時のお父さんは兵隊ではなくて軍属として出征したの。」「何で“軍属”だったの。」「戦前の我家は運送会社を営んでいてトラックを持っていたから。そのトラックが徴用されて、お父さんは運転手として出征したのね。」「その輸送船はどこで沈んだの。」「それは“小笠原諸島近海”と言う事しか解らないのよ。」そう説明をしてから「これもズート後になって解ったの。死んだのは昭和19年だったけれど、戦死の通知は昭和23年になって役所から届いたのね。」と淡々と話してくれた。そして父が出征する時の事も思い出しながら言った。「あの時は、どこに行くのかも軍事機密だったから言えなかったのね。多分私から聞いても答えてくれなかったと思って確かめもしなかったわ。家の玄関で靴を履き終わると振り返って、ジーンと家の中を見回して“行ってくる。”とだけ話して出て行ったわ。多分もう帰って来ることはないかもしれない、と思っていたのでしょうね。」と話し、そしてポツンと「何でこんな事になってしまったのでしょうね。戦争なんて何の役にも立たないのにね。」と言葉を付け加えていた。

★今年（2015年）の6月22日の朝日新聞の埼玉県版欄に“熊谷空襲”についての記事が掲載されていた。この“熊谷空襲”と言う言葉に対して、私は人一倍反応してしまう。それは私にとって一番深い—古い—記憶事項であるからだ。

太平洋戦争開戦の数ヶ月前に生まれた私には、戦前大家族の中で生活していた時の記憶は無い。母や祖母からは「昔は駅前の大



な家に住んでいたの。家にはいつも親類の人や仕事師の人たちでごった返していてとてもにぎやかだったのよ。」と運送会社時代を懐かしみながら祖母が話すと「でもね、戦争が激しくなって来たので強制的に家を取り壊されてね、オバアチャンは叔父さんのところに、私は貴方とお兄ちゃんを連れて熊谷の実家に疎開したのよ。」と母が語り継いでくれた。



昭和20年(1945年)8月14日の夜(正式には15日午前零時23分から)、房総半島南部から進入した米軍機(B-29爆撃機と艦載機群)の投下する大量の焼夷弾によって熊谷市内は瞬く間に火に包まれ炎上、燃えさかる街中を人々は逃げ惑った。私達母子三人もその中の一家族で、もし祖母を連れていたら逃げ切れることは出来なかったろう、と母は後日言っていた。母は私を背中に背負い兄の手を引いて炎上する市中から郊外に逃げ延びた。私はその間泣くことも忘れて母の背中にギュッとしがみ付いたまま眼を閉じているだけであつた。時々眼を開けると回りは火、炎上する家々、逃げる惑う人達、そして叫び声、怖くなってまた眼をつぶるだけ。しかし頭上ではB-29爆撃機の発する重苦しいゴーン、ゴーンという不気味な轟音は、恐ろしさがさらに押し被さって来るようであつた。

私達母子三人は市街地から離れホッとしながら農道を歩いていると、ある農家の前で女の人から声を掛けられた。「大変でしたね。こちらにお入り下さい。」と言ってその家の防空壕に招き入れてくれた。暗い防空壕の中に入り



板の上に降ろされ防空頭巾を脱がされても、私は泣くことも言葉を発することも出来なかった。招き入れてくれた女性は「怖かったですよ。これは家の納屋が焼けてしまい積んであつたじゃが芋が焼き芋になったの。食べて。」と言ってホカホカの焼き芋を出してくれた。お腹がすいていた私は夢中で食べたのを思い起こす。4歳になる直前の強烈な記憶であるが、それ以降の事柄は全く覚えていない。

ていない。

行政命令による強制撤去で家は無くなり、疎開先の住まいも焼けてしまった私達親子は、その後静岡県伊東市の旅館の一室に移り住んだ。母はひたすら父の帰りを待つ生活であつたが、結局終戦後の三年目になって厚生省から戦死通知が送られてきた。母は38歳で私達二人の兄弟を持つ未亡人になったわけだが、当時戦争未亡人は当たり前の世の中で、気丈夫に働き始め、少しして東京に戻り20年間の会社勤務を勤め上げた。世情の変化の時々母は「お前達のお父さんが生きていてくれたらね。」と言っていた事を思い出す。そして「あの頃は何も出来なかったからね。」とボソッと付け加えていた。そして特に母は「熊谷空襲」は8月15日の終戦の前日の夜だったのね。まさか半日前に空襲に合うとは思ひもしなかったね。アメリカさんもそこまでやるとはね。おかげで私達は何も無くなったのだから。」と悔しそうに言っていた。家を失い、夫までも軍属として徴用されて更に失い、

残ったのは幼い子供二人と姑だけ。国の巨大な力によって破壊され一変してしまった戦後の生活を見つめて、何も出来なかった事に対する無念の悔しさが、この言葉に込められていたのであろう。

★入社試験の作文には、①父は太平洋戦争で戦死したこと、②“父親”と言う感覚は解らないが、いずれ自分も“父親”になる。ただその事には不安がある事、③父を奪った戦争には大きな怒りを感じると同時に自分も“熊谷空襲”で恐ろしい思いを経験した事、④結論として戦争には大反対である事、など感情のままに書いた事を思い出す。

その後私は社会人となり子供も生まれ父親になった。そして世の中の移り変わりの中で子供達に対し、しばしば自分の思いを言ってきた。「今までの人間の歴史は、見方を変えれば“戦争の歴史”と言っても良いのかも知れない。確かに戦争の後は急激な発展をもたらしたが、戦争は破壊しつくすこと、人を殺しつくすことが直接の目的で何も生み出さない。現代人は過去何回かの戦争を経る中で、戦争の愚かさを知り学び取ってきた。高度に発達した現代社会の新時代においては、戦争によって問題の解決を求めてはならないと思う。その点戦後の70年間、戦火を交えることの無かった日本は素晴らしいと思う。だからこれからお前達は色々な異なる立場に立ったとしても、こと“戦争”については絶対に反対して欲しい。」と。“戦争”は、我家のささやかな生活を破壊し、後々までも大きな影響を与えた。我家だけでなく多くの家庭が同様な影響を受けていると思うと・・・。

★今日本では安倍自公政権により“安保法制”が強引に整備されつつあり、再び“戦争をする国”になろうとしている。安全保障環境が厳しくなっている、とその根拠を強調しているが、その説明には説得力が感じられない。世界情勢は日々変化しており、今の世界は20世紀の世界とは激変しており、武力に重点をおいた対処策は無効であると言える。かつての歴史を繰り返すような道に踏み出すことの無いように願わずにはいられない。

★<熊谷空襲・追記>

“熊谷空襲”を調べてみると、当時の米軍の行動には納得が行かないし怒りさえ覚える。朝日新聞の記事では、当時の米軍が『戦略爆撃調査団文書』の中で、軍用飛行機生産の中軸企業・中島飛行機の部品生産を行っている下請け小工場が熊谷市内には複数あり、そこを標的としていた、と記している。爆撃は約90機のB-29爆撃機が高高度から8千発の油性焼夷弾を投下し市街地を集中的に爆撃した。その結果市街地の3/4、全戸数の40%が焼失し、266人が死亡、約3千人が負傷している。それにしても腑に落ちないのは、何故終戦当日のその日の真夜中に爆撃を行ったのか、と言う事である。既に当時の日本は、制空権や制海権を失い対抗力は弱体化して、米軍の爆撃に際してはなすすべが無い

状態であった。さらには焼夷弾による爆撃は、木造家屋が多い市街地を焼き尽くす事を狙っており、まさにジェノサイドー大量虐殺の何ものでもなく、そして終戦が秒読み段階になっているにもかかわらずの爆撃で、非人道的な行為とも思わすにはいられない。



←空襲前の熊谷市役所（左）と熊谷市公会堂（右）



空襲前の熊谷市



この夏特に思うこと

まちづくりコース
高橋 幸子

今から十数年前の早春のころ、「南九州バスの旅」ツアーに参加しました。熊本、宮崎、鹿児島と観光名所を巡り、最後は鹿児島の知覧「知覧特攻平和会館」という所でした。

道の両側には大きく背の高い石灯籠がまるで並木のように並んでいました。後でわかったことですが、この地から特攻隊員として戦地に散った若き**1036名**の方々、一人ひとりの石灯籠でした。誰もがご存じの通り突撃直前の基地として日本全国から十代後半から二十代になったばかりの航空兵が死を前提の特攻隊員として集められた所でした。

死直前の遺書、写真、遺品など五千点に及ぶおびただしい数の展示品があり、一つひとつ読み進むうちに、涙は止まらなくなり、胸が張り裂けそうになりました。多くの若き特攻隊員を見送った女性の方の証言ビデオを見聞きして



頭では何も考える事ができなくなっていたことを覚えています。ちょうどその時私にも同年齢の息子がいました。

戦後70年の今、集団的自衛権、安保法制で日本を守る、と連日報道されていますが、納得できない戦争に国民が巻き込まれるのでは無いかと、心配しています。今まで築いてきた平和国家としての信頼を守る事のほうが、国民にとってより幸せな事では無

いかと思います。敗戦色濃い年に生まれ、写真の父しか知らない私の心からの願いです。



日本大百科全書(ニッポニカ)の解説 特攻隊

太平洋戦争の末期に日本軍が編成した生還を期さない体当たり攻撃部隊。特別攻撃隊の略称。航空機などを爆装し、搭乗員もろとも敵艦に体当たりした。航空特攻の場合、1944年(昭和19)10月、フィリピンにおいて、第一航空艦隊の命令によって編成され出撃した神風特別攻撃隊が最初であり、このときは、米軍の護衛空母群に大きな損害を与えた。以後、特攻攻撃は、日本軍航空部隊の主要な戦法となり、沖縄攻防戦では、45年4月から5月の時期を中心に陸海軍あわせて約2500機もの特攻機が出撃し、さらに、本土決戦のために多数の特攻機が配備された。特攻攻撃には、旧型機や水上機、練習機まで含めたあらゆる種類の航空機が投入され、母機から発進する体当たり専用の小型グライダー「桜花」や、体当たり用の大量生産機「剣(つるぎ)」も開発されている。米軍は、レーダー網の整備や艦載戦闘機・対空火力の増強、特攻機の出撃基地に対する攻撃などによって特攻攻撃に対抗したため、日本軍搭乗員の練度の低下とも相まって、大多数の特攻機は目標突入以前に撃破され、戦局に影響を与えるほどの戦果をあげることはできなかった。また、日本本土の防空戦では、高空を飛来するB-29への体当たり攻撃を任務とする迎撃特攻隊が編成されている。旧日本海軍の「神風特別攻撃隊」が初めての攻撃を実行してから、10月25日で70年を迎える。特攻隊戦没者慰霊顕彰会によると、**特攻による戦死者数は6418人**。

※編集人の母校 中央大学の先輩である「穴沢利夫少尉搭乗」の写真です。



1945年4月12日、知覧陸軍飛行場より出撃する陸軍特別攻撃隊第20振武隊の一式戦闘機三型甲「隼」(穴沢利夫少尉搭乗)と、それを見送る知覧町立高等女学校(現鹿児島県立薩南工業高等学校)「なでしこ隊」の女学生達



★**惜別の歌**【穴沢利夫追悼 FLASH】 [コントロールキーを押しながら下線クリック](#)

<http://www.interq.or.jp/classic/jupiter/sekibetsu/>

穴沢さんは大正11年2月12日、福島県耶麻郡駒形村で生まれた。

農村に児童図書館をつくるのが将来の夢だった。

昭和15年、文部省図書館講習所を卒業し、中央大学法学部に進学。お茶の水の医科歯科大学の図書館で働きながら勉学を続けた。



昭和16年夏、図書館講習所の後輩たちが穴沢さんの働く図書館へ実習にやってきました。その中に婚約者となる孫田智恵子さんがいた。



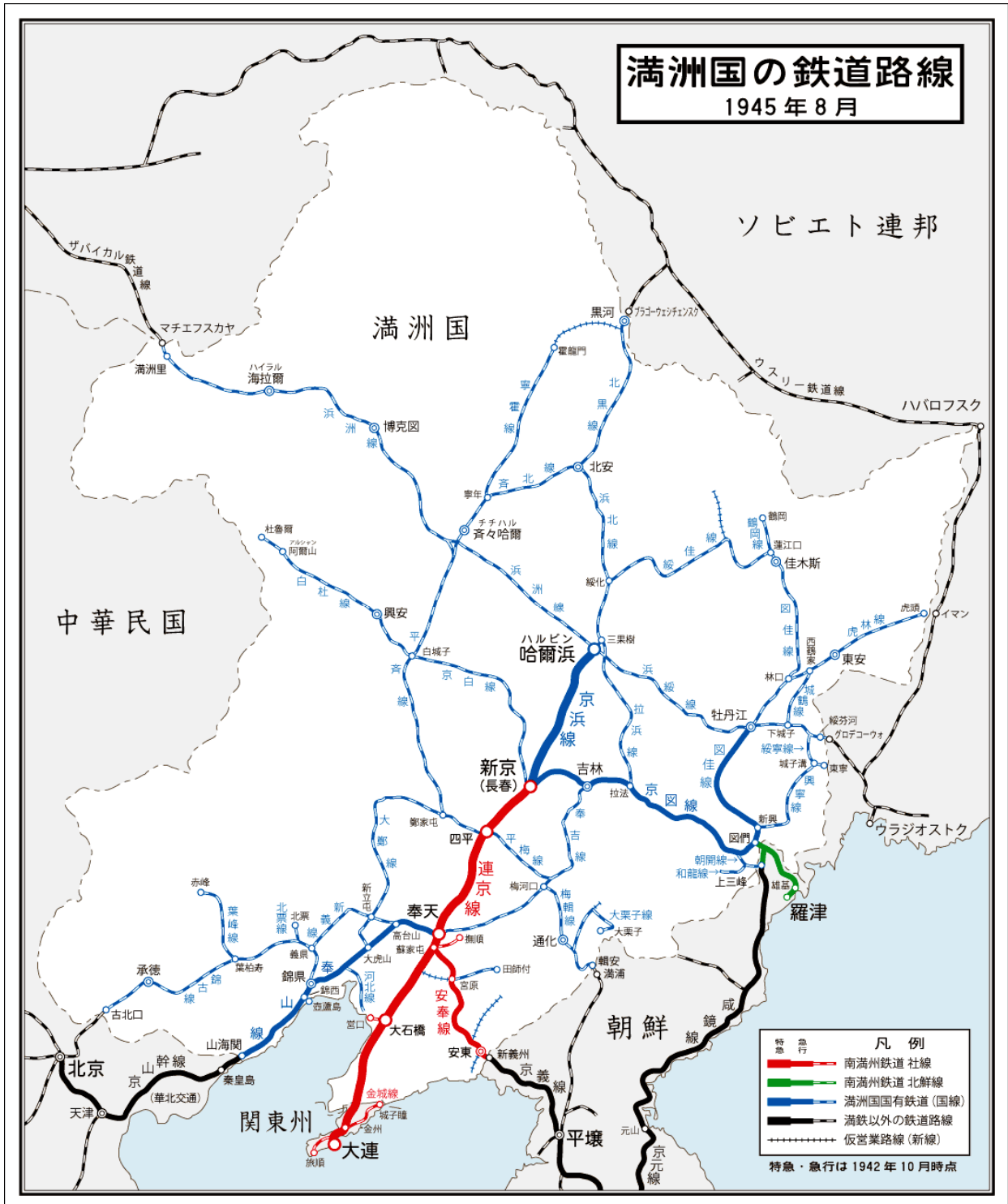
穴沢利夫少尉の書籍 <http://www.interq.or.jp/classic/jupiter/anazawa/>

終戦の日（満4歳4ヶ月）の体験

郷土コース 森田 啓資

私は、昭和16年4月1日に満洲国 新京特別市（現在の中国東北部 長春）で生まれた。父が満洲国電信電話公社に勤務していた関係で、その転勤に伴い満洲国内を転々として育ったとのことである。しかし、昭和19年に奉天市（現在の瀋陽）に転居する以前のことは、全く記憶にない。奉天市には、昭和21年生まれの弟を加え家族4人全員で日本に引き揚げる昭和22年8月まで在住した。

昭和20年の初頃から、「ソ連軍が参戦し日露戦争の時と同様に奉天が主戦場となる」と



の観測が強まり、婦女子は奉天市から満洲国南部方面（日本海近辺）に疎開することになった。私も母と二人で南部方面の某都市に疎開し、その地で終戦を迎えることになるのだが、その街の名は忘却の彼方である。両親及び当時を知る知人縁者とも亡き今となつては、その名を確認できない。疎開先の住宅の近くに放送局と電波塔が在った記憶が有るので、それなりの規模の都市であつたと思われる。



奉天の街

「昭和 20 年 8 月 15 日正午から玉音放送があるので全員謹んで拝聴するように」との通知が回った。当時は携帯ラジオもなく、ラジオのない疎開者達が、ラジオを所有する近所の住民（日本人）宅に集まり拝聴することになった。「幼児は来なくてもよい」と言われたが、独りで留守番が心細かったのに加え「玉音放送？何だ？」との好奇心に駆られ、強引に母について行った。日本間の座敷に約 20 人がビッシリと正座し待ち構えるなか、玉音放送が始まった。ガァ〜ガァ〜ピー〜ピー〜との雑音に混じって、聞き慣れない口調のオジサンの声が聞こえてきた。満 4 歳 4 ヶ月の私には何が何やらチンプンカンプンで、しかも、正座している足の痺れが厳しくなり、「早く終わりますように！！」と唯ひたすら願っていた。放送終了後、大人達は涙を流しながら何事かを話をしていたが、私はヤット放送が終わった解放感と安堵感に浸っていたのを思い出す。

同じ日の午後 3 時頃、突然、自宅前の道路で喊声と地震かと思える程の地響きが続いた。何事が起きたのか？と二階に駆け上り眺めると、数え切れない位に大勢の中国人が、道路一面に広がって右方向から左方向に向け喊声を上げながら我先に走っていた。人々が疾走する流れは全く途絶えることなく約一時間続いた。恰も人間が大洪水と化して流れているようで、私はその迫力に圧倒され鳥肌立てて震えながら呆然と眺めていた。人々の疾走が始まって暫くすると、反対方向から荷物を目一杯に抱えた人々が我先に走りながら戻って来て、自宅に荷物を置くと再び飛び出してもと来た方向へ一目散に走り去っていった。手に持って来た荷物は、初めのうち、高級な調度品・衣類等であつたが、徐々に鍋・釜・食器となり、遂には、屋根瓦 1 枚を抱えている者もいた。最後は、手ぶらの人々が歩いて戻り騒動は落ち着いた。

この騒動は、日本の敗戦と同時に、中国官憲が日本人警察幹部の自宅を捜索し、そのあとを中国人一般民衆が我先に駆けつけ、全ての財物を略奪したものだそうである。略奪された日本人警察官とその家族の消息は不明とのことであつた。後刻、略奪された日本家屋を見てきたが、屋根瓦も全て剥ぎ取られ壁と柱以外は何ひとつ残って無い状態であつた。今にして思うと、以前映画で見た「牛がピラニアに襲われ白骨だけ残った」シーンを連想する。この騒動も戦争が持つ異常性や狂気性の一局面であろうか。

同じ日の午後5時頃、この街に進駐してきた中国軍から突然に「日本人は本日24時までに全員この街から退去しろ。命令違反者は即刻銃殺」との命令がでた。当時の中国は八路軍（毛沢東 率いる共産党軍）と国府軍（蒋介石 率いる国民党軍）を中心に内戦状態にあり、命令を出した中国軍がその何れであるか、満4歳4ヶ月の身には知る由もない。終戦により一日にして敗戦国民となり母国の保護・後ろ盾を失った一般の日本人は、新しい覇者の命令に服する外ない状況であったと聞く。刻限の24時までに数時間しかなく、現地の日本人社会はパニックに陥った。

母と私は取る物も取敢えず、必要最小限の衣類と持てる限りの食糧・水をリュックサックに詰め込み、大急ぎで鉄道の最寄り駅に駆け付けた。駅周辺は既に日本人避難民で大混雑しており、駅に近付くことすら不可能な状態であった。しかも、鉄道は機能マヒして不通であり、回復の見込みは立たないとのことである。止む無く、人々は鉄道利用を諦め、思い思いの方向に向け歩き始めた。母と私は父が待つ奉天市に向け、取敢えず隣の駅まで歩くことにし、その方向に向かっている人混みの流れに加わった。“隣の駅”と言っても日本本土と異なり駅間距離は少なくとも40~50kmはあったと聞く。

市街地から一歩外に出ると郊外は街燈も人家もない暗闇の世界であった。しかも、当日は月明かりすら無かった。その中を、恐らく1万人は下らないと思われる日本人避難民が黙々とひたすら歩いていた。母は自分の手と私の手をシッカリと紐で結わえ付け、如何なる場合も決して解くことはなかった。そのお蔭で母と離れ離れにならずに済み、今でも母に感謝している。もし離れ離れになり混雑した人波の流れに巻き込まれていたら、混乱した異常事態下での再会は極めて困難な状況であり“中国残留孤児”になっていた可能性が高い。この時も、何人もの母親が半狂乱になりながら我が子を必死に探し回っている姿を目撃したが、再会を喜び合う姿は見る事が出来なかった。後刻、再会できたことを祈りたい！！

“中国残留孤児”問題や山崎豊子著「大地の子」は、私にとって決して他人事ではなく、涙なくして接することはできない。

現在、当時の私と同じ年頃の孫がいる。平和を享受して育った明るく屈託のない笑顔が素晴らしく、目に入れても痛くない程に可愛い。（ジジ馬鹿は自覚！）終戦70周年記念の年あたり、「この“明るく屈託のない笑顔”を子々孫々に至るまで戦争で消してはならない」と改めて誓う次第である。以上

※編集人より、森田さんの投稿文を読ませていただいた時に、私の妻と同じような苦勞し中国残留孤児にならずに帰国できて、今があることに思いを馳せました。妻の父は南満州



鉄道、超特急アジア号の運転士だったことから、4人姉妹の末っ子の妻は北京市生まれ。敗戦後、父親が人民裁判に掛けられたが、部下思いだった父を助けたのは中国人部下の証言で無罪放免となり、一般のより一年遅れで帰国した。姉たちは中国での思い出もそれなりにあり、2回ほど北京を訪れているが、妻は中国の思い出は嫌ことばかりで、中国には行きたくないと言って姉たちの誘いを断っている。

戦争とは

郷土を知るコース 伊藤 昭子

戦争とは？70億の地球上の人類がそれぞれ自己主張を通して生きていくうえで自分達に不利な条件を武力により排除して行こうとする行動であり、それを通す為に、強制的に周りを力で括ると言う行為です。それによる犠牲者の悲惨な状態を考慮して何とか戦争は避けられないものかと各国の首脳も考えるものの、自国の不利益となる事はできない。

私の疎開体験：2才で祖母、母、兄（7歳）と共に、信州小海線沿いの海瀬村（かいぜむら）に引っ越してきました。それまでに父と祖父は病気で亡くなっていました。祖父の親類が住む裕福な蚕農家の村で借りた家も蚕を飼うための二階建ての一軒家で庭の池には鯉が泳いでいました。



玉音放送：3歳の時に祖母に手を引かれて村の小学校へ行きました。二階の講堂には村の大勢の人が正座しており、私には何の事か全くわかりませんでした。そのうち男性の大きな声が響き渡りみんなが頭を下げていて、放送が終わると、正面に飾ってあった立派な男性の肖像画（今思えばあれが昭和天皇）が後ろに下げられて扉が閉められました。

東京へ転校：小学2年の夏休みに空襲を免れた中野の町に家を建てて、東京へ戻ってきました。生活の違いに戸惑ったのを覚えています。

1. 夏休みの期間。海瀬村では田植え、稲刈りで学校が休みになるため夏休みは2週間。東京では7月末から8月一杯ずっとお休み。
2. 環境の違い。千曲川で泳いだり、畑でいなごを取ったり、野原で蛍を追いかけていたりして遊んでいたのに、、東京中野の小学校の後ろを流れる神田川は、河原はなく、川は細く囲まれていました。校歌；「神田上水背負いつつ、我らは学ぶ向台に（むこうだい小学校・5年前に廃校になりました。）御国の恩ため、家のため」

★関 利雄さんとの出会い。

開戦の年に生まれた私にとって、空襲の恐怖にさらされる事もなく、終戦後の食糧難の実感もないままに年を重ねてきました。原爆ドームの写真を見たり、姫ゆりの塔を訪れたり戦争を勉強したつもりでいました。ところが、さいたま市のシニア大、埼玉県のいきがいで大学で、関 利雄 さんの「太平洋戦争体験」の講義を何度か聞かせていただく機会に恵まれ、改めて「戦争とは」と深く考えるようになりました。人類が直面する戦争、その悲惨な成り行きは何かくい止めなくてはなりません。次世代の子供達にいかにか伝えるか、大きな課題と受け止めています。

民話「星川の提灯（熊谷市）」

去る6月15日、21期校友会メンバー民話の会「いろりばた」の口演会が開かれ、私達専科一期校友会の会員である関利雄さんが出演するので、専科一期校友会HPに掲載するため取材に訪れた。口演会では戦後70年というタイムリーな出し物として、昭和20年8月14日の熊谷市空襲をベースに語られるようになった民話「星川の提灯」を、シニアユニバーシティ時代のクラスメートである山田勝子さんが語ってくれた。それを聞いて初めて私は熊谷市の空襲を知った。投稿いただいた北氏さんのように、直接被災されている方もあるので、民話「星川の提灯」を紹介したい。

★「熊谷市の星川にまつわる話である。今から70年以上も前、日本はアメリカと戦争をしていた。アメリカの飛行機が毎日のように日本の空を飛び、爆弾や焼夷弾を落とした。このために、たくさんの方が死に、家が焼かれた。星川の流れる熊谷の町が空襲にあい、焼け野原になったのは昭和20年8月14日の夜であった。空襲を知らせるサイレンの音が響き渡るうちに、町のまわりから火の手があがり、みるみるうちに火が広がっていった。



ゴーゴーと音をたてて、家が焼け崩れていく。土蔵の壁には、炎が勢いよく這い回り、窓から火が噴出している。

誰言うとなく、「星川へにげろ、星川へにげろ」と、町の人達は、熱風のふきまくる道を火の粉をかぶりながら走った。びしょ濡らした防空頭巾もカラカラに乾いていた。星川へ逃げのびた人には、家族の名前を呼び合い、次々と川に飛び込んだ。町中が火の海となり、やがて、星川のまわりの家にも燃え広がってきた。星川に身を伏せた人達の上に、炎が走り、折り重なるように人々は死んでいった。それは、地獄のような、むごいありさまであった。

★つぎの日、戦争は終わった。

「たった1日の違いで、多くの方が苦しみながら死なにやならなかったとはのう。」

「気の毒なことよのう。なんまんだぶ、なんまんだぶ。」

生き残った熊谷の人達は、星川で亡くなった人達をねんごろに吊った。

そして、1年がたった。

8月14日の夜のこと。星川のほとりに住む清さんは、お寺からの帰り、隣の薬屋さんの前の木の枝に、提灯がぶら下がっているのに気がついた。



「おや、岐阜提灯じゃないか。薬屋のおばあさんがお供えしたんだらう。」薬屋の一家は1年前の空襲で、みんな亡くなってしまい、焼け残った土蔵に、おばあさん一人が暮らしていた。

「それにしても、提灯が1つだけじゃ、なんともさびしい。うちでもつるすべえ。」

清さんは、家にあるくこんばんは提灯>にろうそくをともして持ってきて、岐阜提灯の隣につるした。

次の15日の晩。

薬屋のおばあさんは、家の前の星川べりの木の枝に、丸いくこんばんは提灯>がぶら下が



っているのに気がついた。

「おや、こんなところに提灯が。きっと、清さん家で吊るしなさったんだらう それにしても、たった1つじゃさびしいこった。うちでも1つ、お供えすることにしよう。」

薬屋のおばあさんは、家からこんばんは提灯に燈をいれてくると、下がっている提灯と並べて 吊るした。そして、お線香をあげ、念仏を唱えた。

おばあさんは、清さんの家も家族三人を去年、この星川で亡くしたことを知っていたからだ。

翌朝。清さんと薬屋のおばあさんは、星川のほとりに立っていた。川べりの木の枝には、清さんとおばあさんが吊るしたくこんばんは提灯が二つぶら下がっているだけだった。

「おや、岐阜提灯がないぞ。あれはおばあさんが出したんじゃないのかね。」

「いいや、私じゃないし、夕べはそんな提灯なかったよ。清さんが吊るしたんだらうと思った、こんばんは提灯が一つきりだったね。」

「おとといの晩、私が見たのは、岐阜提灯一つだけだった。それではさびしいと思って、このこんばんは提灯を吊るしておいたんさ。」

「そうすると、清さん、その岐阜提灯はいったい、どなたが吊るしたんだらうかね。」

「ううん。誰かが吊るしたに違いねえが、一晩でなくなっちゃうとは、げせねえこったな。はて…」

清さんは首をひねった。

さて、16日の晩になった。

星川の岸边には、燈をともしたたくさん提灯がかけられた。

清さんとおばさんにならって、近所の人達が、

「うちも、空襲で亡くした娘の吊いに、提灯を供えましょう。」

「それでは、うちも、お向かいさんの供養に…」

と、いうわけで、こんばんは提灯を持ち寄ったのだ。

「提灯も、これだけ並べりゃ、綺麗なもんじゃ。」

「これで星川で亡くなった人達の魂も、慰められることじゃらう。」

「良かった、良かった」

お線香を持って、星川のほとりに集まった人達は、そう言って手を合わせた。

それにしても、清さんは不思議でならない。その晩、また誰かが岐阜提灯を吊るしにやって来はしないかと、待っていた。でも、いつまでたっても、あの岐阜提灯を吊るしに

来る人はいなかった。みんなは、「あれはきっと、星川で亡くなった人達の魂が、岐阜提灯を吊るしにやってきたに違いない。」と言い合った。

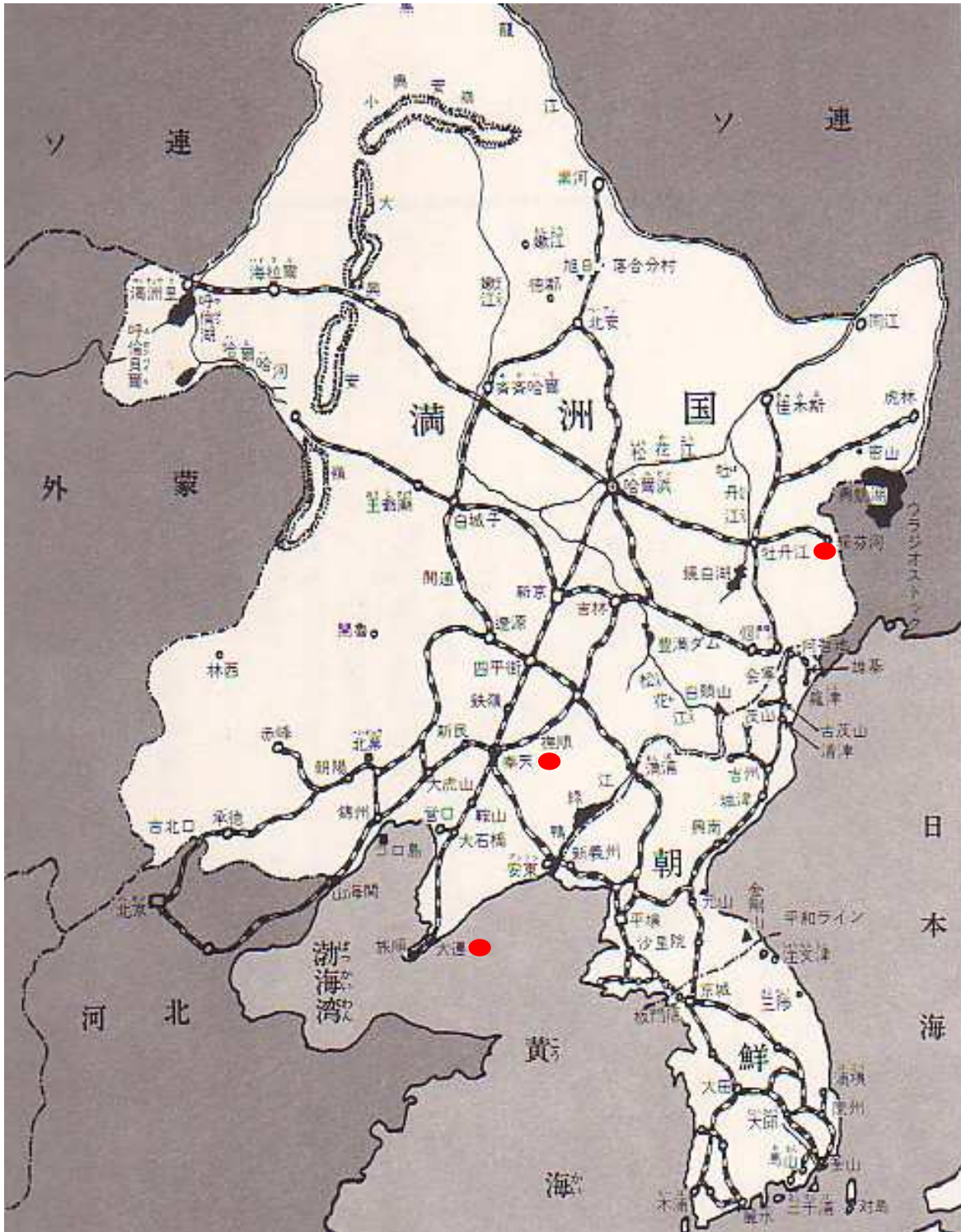
それからというもの、星川には亡くなった人達の魂を慰め、戦争の愚かさ、苦しさを、いつまでも忘れないようにと、毎年8月16日に提灯が吊るされ、燈籠流しも行われるようになったという



我が引き揚げ記

郷土コース 野村 侃滋

「生まれはどこ？」と聞かれるといつも困ってしまいます。今は存在がなく、私も全くわからない国での生まれだからです。私の出生地は「満州国・牡丹江省・牡丹江」と戸籍には記載されています。牡丹江という町は、現在、黒竜江省・牡丹江市となっている所です。



従って昔の言葉で言えば「引き揚げ者」、現代風に言えば「帰国子女」でしょう。現在、私の両親も亡くなり、引き揚げた当時のことを知っている親戚も皆亡くなりました。しかしながら、まだ母が元気なころ、引き揚げてきた有様や苦労話を酒が入ると良く語ってくれました。酒を飲んでいたのは私だけで（今から思えば父が生きていた頃は引き揚げの話はしなかったようです）、傍で引き揚げ時の話をしながら、酒の付き合いをしてくれたものです。苦労した引き揚げの体験が忘れられてはならない、少なくとも私の子供だけでも伝えたいと考えていました。私自身全然記憶のない「母から聞いた話」ですが、私が体験したことは事実でしょうから、私の体験記風にまとめてみることにしました。

満州国・牡丹江は結構北の方で、アムール川に流れる込む松花江と言う河の支流「牡丹江」の名前が地名になっています。父は、昭和14年に牡丹江の円明尋常小学校の先生として赴任をしました。

昭和18年に結婚して、母を連れて行きました。翌昭和19年には私が生まれました。母はそれこそ右も左もわからない満州国で最初は相当苦労したようです。それに、私は未熟児だったので、本当に大変だったようです。

幸い、学校関係の家族との付き合いの関係

で段々慣れていったようです。そんな母のエピソードがあります。ある日父が納豆を買ってきたそうですが、山口県生まれの母は「納豆」と言えば甘納豆しか知らなくて、「まあ！腐った納豆を買ってきて！なんともったいない！」と捨てたそうです。父が帰ってきて納豆を捨てた話をすると、父から発酵納豆のことを聞き「勿体ない事をした」と言ったそうです。内地とは気候も風習も全く異なる地へ行って戸惑ったことが数多くあったことを偲ばせる話です。

父の姿としては、向こう岸が見えないほどの牡丹江が全面凍り、その上で生徒にスケートを教えている写真が残っています。満州の冬は雪よりも氷の世界でした。牡丹江市は港湾が開かれているほどの都市で、そこを流れている牡丹江は、大きな船が行き来する国際河川の一つです。向こう岸が見えない位の牡丹江の河が冬には一面凍って、スケートリンクになりました。厳冬期にはマイナス40℃以下にもなり、ある時生徒が校庭の鉄棒を舌でなめたら凍って離れなくなったとか、小便がすぐ凍るため便所には金槌を持って入ったなどのエピソードもあります。

ソ連との国境に近い場所なので、私の家の裏にはロシア人の家族が住んでいて、私を可愛がってくれました。白系ロシア人のおばあさんが私を抱いている写真も残っています。近くには、大都市ハルピンがあり年に数回は買い物や遊びに行っていました。そんなところは欧米的な風習を見習っていたようです。終戦間もない時代で、幼稚園にはまだ着物姿、



わらぞうりが見られる頃でしたが、洋服、靴（もっともズックでしたが）で年に1回は家族で動物園や温泉など旅行に行くなど、この風習は引き上げ後も続きました。

当時は、中国人をさげすんでいたようで「満人」と呼んでいました。戦争中は近所の満人も仲良く円満そうに近所付き合いをしていましたが、終戦の声を聞いたとたん日本人の家に押しかけ略奪を始めました。父は終戦直ぐに帰国すべく、中国服姿と何とか話せる中国語で先行してルート作りに家を離れました。家には私を抱いた母のみなので鍵をかけ誰も入れないようにしていましたが、ドアを激しく叩き壊れるのではとヒヤヒヤの連続でした。食物が無くなり満人は分けてくれなく、母は苦勞しました。このためいつも空腹の状態で、良く泣いていました。しかしドアが叩かれると恐怖に変わり、直ぐに泣き止みました。すぐに母の「満人が来た」の声だけで泣き止むようになったそうです。

終戦後間もなく父から連絡が来て、まずは大都市奉天に逃げのびることになりました。奉天での落ち合う場所と乗る列車が指定されました。父は学校関係のツテを頼ったりして情報収集をして安全な脱出ルートを探し更に列車の手配までしていたようでした。奉天で落ち合う場所と乗る列車が指定されました。母は私を背負い汽車を使って移動を開始しました。しかし、敗戦のため時刻表は大混乱で、乗るつもり汽車は来ないし、何時来るかも全くわからない状況が続き、大変な移動でした。駅やその近くで汽車を待たざるを得ません。そこでは多くの日本人が略奪に遭いました。勿論、私の母もそれから免れることはできませんでした。それでも終戦後間もない頃だったためか、奉天までは順調と言えたでしょう。

しかしながら、奉天から引き揚げ船の出る大連までの道のりは長いものでしたし、治安もどんどん悪化してきて、常に死と直面している緊張の連続でした。日本人は集団で行動しましたが、これが悪い結果になったこともありました。ある時、汽車を待っている私と母を含めた日本人集団を満人が駅に襲ってきました。日本人は一斉に、近くのコーリャン畑の茂み—中国人の主食だったモロコシ畑のことですが—に隠れました。その中には、私たち親子以外にも赤ん坊を抱いて隠れているお母さんも沢山いました。赤ん坊が泣くと隠れている他の日本人が見つかり、皆に迷惑がかかると



思ったのでしょう、泣きだした赤ん坊の口をふさぎ、死に至らしめたお母さんも多くいたようです。幸い私は“満人が来た”の母の声で泣きやんだお蔭でそんな目に遭わずに済みました。公道で襲われた時には、母は持ってきた衣類などを与えて逃げ延びました。このため、相当な財産を持ち出したにもかかわらず、帰国した時は文無しでした。聞く限りでは「トランクいっぱい現金を詰めて」出発したそうですが、大連ではトランクはもちろん着の身着のままの状態でした。要所要所で父と落ち合い、父は次の落ち合い場所を探して再び先行していきました。こうして、次の指定場所に移動する日が続きましたが、約1年かけて引き揚げ船の来る港へ着きました。

この間、私は腸チフス、赤痢、ジフテリアなどのほとんどの伝染病にかかりながらも生きていました。しかし、栄養失調にかかりお腹だけでいて、あとは骨と皮だけの状態で、泣く声も出ない状態でした。昭和21年7月9日に何とか舞鶴港へ引き揚げました。迎えにきた祖母は「これじゃ近所の人に孫は見せられない」と嘆きました。それでも肉親です、家に帰って親戚を集め引き揚げを祝ってくれました。私が小学生のころ、そのなかの遠くに住んでいた親戚が、久しぶりに家に来て私に「まだ活着ているのか、信じられないことだ」と言ったことをよく覚えています。それほど親戚全員が、私が活着ながらえることはないだろうと思っていたようです。

今は体だけは元気ですが、これも親のお蔭と感謝しています。テレビで中国残留孤児が肉親捜しに日本へ来ている報道を見ますが、よくぞ連れて帰ってくれたと感無量です。残留孤児の多くは、親が我が子だけは助きたい思いから中国人に預けたり、移動の際に離れ離れになったりして、悲しい運命をたどることになったようです。今にも死にそうだった私を離さずに守ってくれたことを考えるたびに、親の恩を痛切に感じています。

特に牡丹江市は東部満州の拠点として関東軍の基地があり、日本の企業が数多く進出した一大都市でした。一方ですぐ近くの山岳地帯には中国人の抗日部隊の拠点があったところでもありました。このため、牡丹江市は終戦の声が流れるやいなやすぐにソ連軍や中国人住民による日本人住居への襲撃があり、虐殺まであったようです。従って、この牡丹江市からは大量の中国残留孤児が発生しました。私の家も例外ではありませんでした。その時点で父はもう家を離れて帰国工作に走っていました。夜になると満人が戸をたたき略奪をしに来ましたが、灯りを付けず母と二人で潜んで過ごしました。ここでも「満人が来た」の一声で泣き止んだので今の私がいます。

しかしながら母にはこのような苦勞を味わった牡丹江に忘れ難い思いがあったようで、還暦を迎えた年に中国（ハルピン、大連）へ行き懐かしい町を観てきました。満鉄のビルがそのまま残っていたとか、大通りはそのままだったとか、当時の面影を残す牡丹江を堪能したようでした。父は母よりだいぶ前に亡くなったのですが、この満州時代のことは一切話しませんでした。苦勞したことを思い出したくなかったのでしょう。母が思い出話をしだしたのも、父が亡くなってからでした。

このようなまとめをすることは亡き父母への供養と考えています。かつ親がいつも言っていた「親より先に死ぬな」が守れて親孝行の一つをしたと思っています。本原稿は、久喜市高齢者大学での体験発表の原稿(予稿集「公孫樹の梢」に収録)に加筆、改稿したものです。

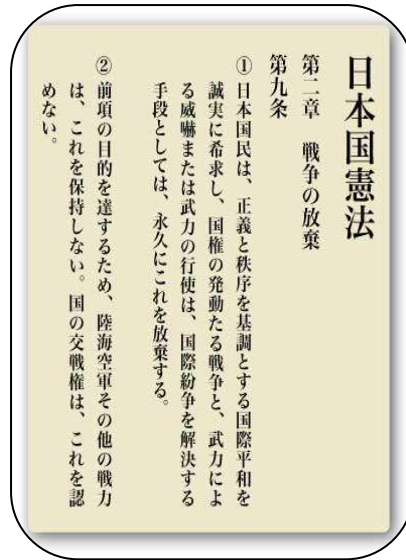


現在の牡丹江市街を流れる牡丹江

戦後70年平和だった日本に危機感を感じる！

健康コース 松山ノブ子

わたしは、戦争の記憶は無い、又身近に戦争に行った者も無い。でも戦後教育で、担任が社会科の教師で戦争の怖さを、又日本は戦争に負けたけど、戦争をやらない、やれない、戦争放棄した9条という憲法ができ、世界的にも素晴らしい憲法で平和な国になると、教えられた。



その後色々な情報や各地を旅して、戦争の怖さ、恐ろしさを知るにつれ平和の大切さを思う。でも最近、安保関連法案も強行可決されたり、武器三原則も緩められ、兵器も作られ輸出も始まるようです。70年平和だったこの国が壊されて行きそうで、不安です。危機感を感じます。孫や子供達のためにも平和を祈る気持ちです。



広島：原爆ドーム



長崎：浦上天主堂



戦争のない平和な社会が続くことを願っています！

健康コース 斎藤志津子

明治生まれの親は、戦争について特別な話はしなかった様に思いますが、母は弟が戦死したので、妹が実家を継ぐ事に成ったと話しました。子供の頃、防空壕に入った記憶も無いのですが、食糧事情の悪さでサツマイモとトウモロコシの粉で作るおやきがまずかった事は忘れません。でもひもじさを感じた事は無かったです。そんな事から食べ物を残す事には抵抗が有りますね。

しかし、我慢強さは学べた気が致します。家族が居る様になってから、映画、ニュース、雑誌、芝居等で、蛍の墓、はだしのゲン、引揚者、慰安婦、岸壁の母、等で少しずつ戦争の体験談、原爆被災者の話、今も其れにより苦しんでいる人達を知りました。以前、知覧に行き、特攻隊青年の遺書、広島原爆資料館の遺品や写真、長野県上田市にある無言館での残された絵画を見た時、沖縄のひめゆりの塔等をその場所でなければ、実感できないものを感じ、大変な衝撃を受けました。皆若い人達が、希望を捨て、やりたい事も突然断たれてしまうのです。悲しく、辛く、無情無念で、どこへもはけ口を向ける事も無く、お国の為という大前提のもとに、駆り出されて行ったのです。自分に置き換えて考えられません。戦後70年はその様な方々の犠牲の上に、成り立っている訳で、考え深いものが有ります。



現在首相は、切れ目のない平和安全法則を整備し、日米同盟が揺るぎの無いものである事を内外に示す事で、日本の平和と安全を守りぬいて行くと述べ、安保法則の整備が抑止力に繋がるとの考えを、述べていますが、本当に其れを信じていれば良いのでしょうか。これから先、戦争の無い平和な社会が続く事を願って止みません。

学童の縁故疎開

郷土コース 田中 忠

大東亜戦争時、私の実家は東十条にありました。京浜東北線で埼玉県に一番近い「赤羽」のひと駅内側です。父の実家は「茨城県千代川村別所」ですぐ脇には鬼怒川が流れていました。父が居た頃はこの川で遡上する鮭を捕まえていたそうです。

戦争が激しくなり、学童の縁故疎開が始ったのは昭和19年。私の兄は12年1月生まれの小学2年生、次兄は14年生まれの5歳、私は1歳未満でした。両親は空襲になれば3人の子供を避難させられないと、驚いたことに全員を父の実家に疎開させました。小学校の校長だった祖父はまだ健在で、いつも長火鉢の前に座りキセルでタバコを吹かしていたそうです。体の大きかった兄はいじめられることもなく、元気に小学校に通いました。私は乳飲み子、近所の農家からヤギの乳をもらって飲んだおかげで育つことができました。記憶には全くありませんが、田舎のヤギのお蔭と感謝の気持ちです。

疎開の期間は約3年、帰京すると妹が生まれていたり、母の父親一家が深川で戦災に遭って焼け出され、東十条で一緒に暮らすようと大きな変化がありました。私の記憶はこの辺からで、祖父母、叔母を含め総勢10人のとても賑やかな家族でした。祖父は「正月の雑煮に」と庭で飼っている鶏を絞めたり、祖母からは火鉢で焼いたにんにくを無理やり食べさせられていました。優しい叔母はそっとお小遣いをくれました。

私には戦争体験そのものはありませんが、国民全体が大変な苦労を強いられたことは、戦後の体験からも窺うことができました。時あたかも安保法制議論の真っ只中、じっくり考えたいと思っています。



学童疎開

我々の出番はなんであろうか

まちづくりコース

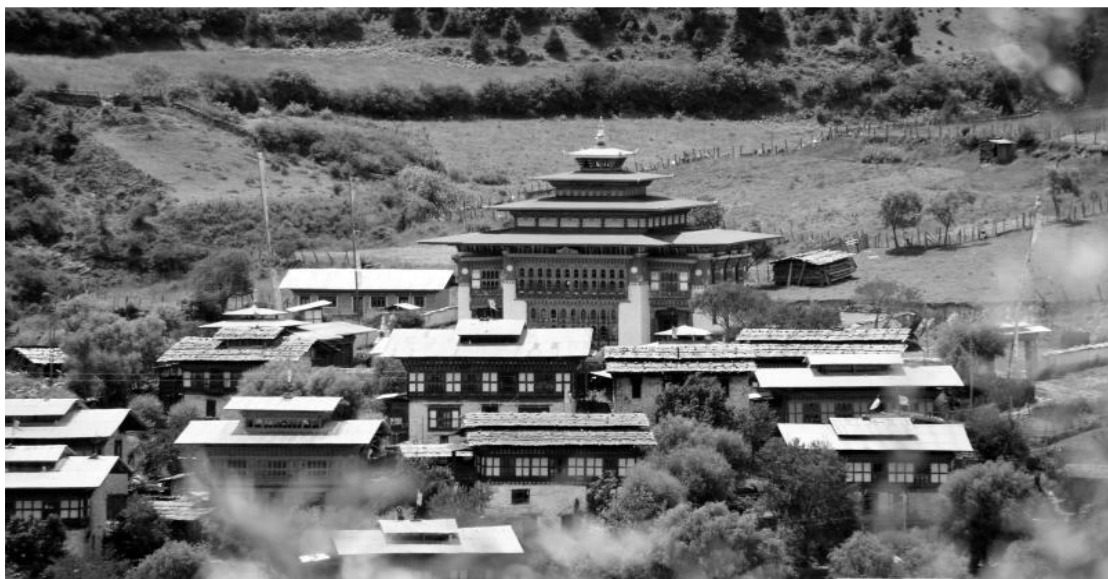
平林 知人

人類の歴史は残念ながら争いの歴史でもある。DNAの中に刷り込まれているのではないかと考えると得心する。人類の知恵はそのDNAから噴出する、あらゆる行動を如何に
くいと止めるか。と云うことになる。

我々の過去の先輩もそんな歴史を学んできた筈である。にも拘らずだ。人類の拠りどころの一つに宗教が存在する、がそれも我が宗教だけが正しいと主張するから、又衝突し殺戮を繰り返す。どうすればいいのか。私は、仏教（坊さん）の出番ではないかと考えている。広い心で包み込む、そして許し合う。無論簡単なことでは無い。

東日本大震災も5年を経過しようとしている。ブータンに行く機会になったのも今回（9月初旬頃）インド、ラダック地方に蕎麦を通じていくことになったきっかけも、その辺に行き着く。ブータンの国王ワンチェクが震災の直後に大きな見舞金を携えて身東北に駆けつけてくれた。仏の心を携えてである。お返しと思いブータンへ駆けつけた。恩返しをしたい思いで。

必至で戦争の繰り返さない国を目指して70年、我々の出番はなんであろうか？



※南アジアにあるブータンは、北を中国、南と東西をインドという二つの大国に挟まれた、面積が九州の0.9倍の国土に約70万人が住む小さな王国です。20世紀以来、先進諸国は経済発展を遂げたものの、物質文明に行きづまり、人間性を喪失するなど、さまざまな壁にぶつかっています。そんな中で、いまにも二つの大国にのみこまれそうな小国ブータンの、GNP（国民総生産）よりもGNH（国民総幸福量）を重視すべきだという取り組みが世界中から注目されています。

その背景には、**仏教の価値観**があり、持続可能で公平な社会経済開発、環境保護、文化の推進、良き統治、という4本柱の下で、心理的な幸福、国民の健康、教育、文化の多様性、地域の活力、環境の多様性と活力、時間の使い方とバランス、生活水準・所得、良き統治の9分野にわたり、『家族は互いに助け合っているか』『睡眠時間』『植林したか』『医療機関までの距離』など、72の指標が策定されています。

残っていた2枚の写真

まちづくりコース
玉置 貞明

昭和20年3月10日の東京大空襲の時、私は母の背中におぶさって逃げ惑っていた。当時、私は足立区の西新井・関原地区のちっぽけな商店街に住んでいて、近所にB29爆撃機から落とされた焼夷弾で焼け野原になったらしい。千住新橋から北に延びる旧日光街道の沿道から西新井駅周辺に掛け大小の工場群が散在していたので標的になった模様だ。

幸いにしてちっぽけな店舗住宅の我が家は爆弾の火災を受けずに済んだけれど、火災で消失した家屋も相当あって、地域住民の恐怖は想像を絶するものであったに違いない。



私の家は人数の割には大変狭かったので、事前に家財の大半を母の実家の北区赤羽と鳩ヶ谷・安行に避難させていた。しかし、我が家から運は逃げていた。避難先の家作が爆撃に遭い灰となってしまった。

母は大事な着物や家財を失くし泣いて悲しんだという。昭和12、3年頃まで浅草・田原町で営業していた仕出し・割烹料理屋の思い出の品々を焼失し嘆いたのであろうか。

残っていた写真の1枚は父と長兄二人が写ったものと3兄と4兄二人が写っていた学童疎開先の記念写真、たった2枚の写真だけであった。私が3歳になった昭和22年に父は亡くなり、ほとんど記憶にない父親像を思い浮かべられるのはこの写真と母の語る「父ちゃんは…」だけになってしまった。勿論、浅草時代の若い母の顔、立ち居姿など想像する術もない。

学童疎開は長野県・野沢温泉村であった。3兄は昭和19年の秋に、4兄は3月10日の大空襲の後の4月、4年生に進級して直ぐに野沢に向かったそうだ。疎開先の学童たちは旅館に分宿し、お寺に集められ授業を受けたという。食事は、東京よりも良かったそうだ。そして、学童が自宅に戻ってきたのは、終戦の翌年だったと兄は云っていた。今から思うに、3人の兄は既に亡くなり、その後、母も17年前に他界してしまっている。戦前・戦中時代の話をもっと詳しく聞いておけばよかったと悔やまれてならない。

靖国とアウシュビッツ

郷土コース 安藤 允浩

「いきがい大学」に入学するに際して心に決めていたことがある。

それは、これから新しく知り合いになる方々とは、「政治」と「宗教」については、どのような場合でも話題にしないようにするということである。これは60年以上の人生を過ごしてきた方々ゆえ、生き方の根源となる「宗教」や「政治」を話題とするなら、かなりのコミュニケーションの時間を取らない限り理解しえないと思ひ、今更、残された時間も少ない中でそのような時間を取るのは煩わしくもあり、勿体ないと考えたからである。

私は「政治」を抜きに「戦争」を語ることは出来ない。今回、岡村兄から文集作成の話があった時もその様な事由で筆を執る気持ちは全くなかった。ただし、御断りをする際に、前述の論拠の一つとして靖国神社とアウシュビッツに関する気持ちをお伝えした。

それに対して、わざわざ岡村兄からアウシュビッツに関しては同じ感覚を持っているので、その部分だけでも記してみたいとお話を戴いた。

★以下、字数も限られる中でうまく気持ちを伝えられるかどうか分からないが、靖国についても記してみる。

私にとって最年長の従弟は、南方戦線で「無駄死」を強要された。母親である伯母のもとには「紙切れがいちまい」だけ入れられた箱が名誉の戦死の記録として届けられたという。伯母は自分の息子に無駄死を強要した上官どもと一緒に「靖国神社」に祀られることに対して拒否反応を示し最後まで抵抗していた。色々と法的な手段も講じたようだが、願いは叶わないまま自分も黄泉の国へと旅立ってしまった。

そんなことも伏線となり、私はいわゆる職業軍人と、「徴兵された民間人」を靖国神社に合祀することに納得がいかない。徴兵されて無理矢理に戦場行きを強制された人々と、戦争することを職業としていた軍人とは、取り扱いをはっきりと区別するべきだと感じている。よく靖国神社を参拝した後に所感を求められた政治家が「御国の為に命をかけて戦った英霊たちに云々」などと語っているのを見聞きすると、何を学んできたのかと腹立たしい。

いまだに首相が参拝するたびに近隣の諸国から非難を浴び、関係がギクシャクしてしまい、事後処理という非建設的な事柄の為に無駄なエネルギーを費やしている。敗戦後から今に至るまで、明確な謝罪も、反省もしないままに70年と言う膨大な時間が経ってしまった。長い年月の間、曖昧にしていたことが原因で、こんがらがってしまった紐を解くには大変な労力が必要だと思う。しかし、このままでは孫子の代まで同じことがくりかえし、くりかえし続いていくことは明白である。



問題解決のためには、原点に戻って「心底からの謝罪と反省」をするしかない。本当は、お祖父さんが戦争当事者であった現首相がきちんと処理をしてくれれば良いのだが、むしろ好戦派とみられるような言動をエスカレートさせている現状では一縷の望みも無い。

★このことを痛切に感じ、確信するに至ったのは、数年前に、ポーランドを周遊する中で通称「アウシュビッツ強制収容所」を訪問した時である。アウシュビッツ強制収容所やナイスについては、「夜と霧」を読んだり、世界史の中で一応、知識としては持ち、観念的には理解したつもりでいた。

周知のように、第二次世界大戦中にナチスドイツにより主としてユダヤ人虐殺の施設として、ポーランド南部に造られたのが「アウシュビッツ強制収容所」である。現地へ行き、解放時にナチスが破壊し損なった残された150棟を越える建物や施設を見るだけで悲惨な生活はある程度、理解することは出来る。ガス室などで虐殺された150万人を越えるといわれる人々が残した、8万足とも言われる靴、4000個とも言われる

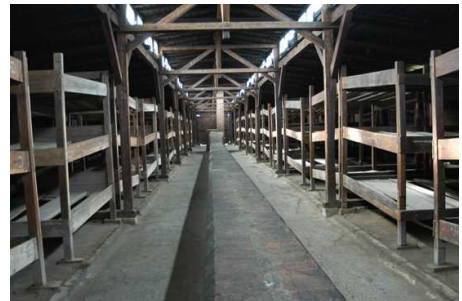


鞆類、1万点以上の衣服や食器類、刈り取られ小山のように積み上げられた毛髪、等々の「陳列品」を前にして言葉を失うほどのショックを受けた。

しかし、私の心に一番響いた、感銘を受けたのは施設の運営方法である。正式には国立アウシュビッツ博物館と言う様だが、悲惨な歴史を多くの人々に知ってもらうためと言うことで入館料が無料なのである。ざっと見るだけでも3時間ほどを要する施設

であるから、運営や維持管理に巨額な金が必要なことは容易に想像できる。

身の毛もよだつという表現がぴったりする、犠牲者たちが残した靴、鞆、毛髪、生活用品などが巨大なガラスケースに入れられて陳列されているが、既に数十年の月日を経ているので、よく見ると、色あせやひび割れなどの退化が見られる。ガス室や収容棟なども常日頃の修繕



を必要として、このまま放置をすると荒れ果ててしまいそうである。

案内をお願いした日本人唯一の公式ガイドである中谷剛さんによれば、運営費として年間9億円が必要であるが、これについてはポーランド政府からの補助金、ガイド料や書籍の販売収入、海外財団からの寄付金で何とか賄っているそうである。しかし、修復費にまでは中々手が回らず、今後、

150億円程度が必要になるとのことであった。すなわち、ポーランド政府は「将来の世代の為に収容所跡を保存する義務がある」と言うことで補助金を年間5億円程度支出しているが運営費で精一杯で本格的な修繕費までは廻せない。

そこで全世界に対して基金設立を呼び掛けたところ、真っ先に名乗り出たのがドイツで、1億5千万円の出資を行い、今後も毎年同額以上の出資を続けると宣言したそうである。

その他の国（含む日本）の反応は極めて鈍いそうである。

年間、100万人を超える入館者があるそうだが7割は外国人だそうである。ガイドの中谷さんが日本からの見学者（特に若い人）が少ないことを憂いておられたので、「距離的にチョット遠いから・・・」と申し上げると、「隣国の韓国からは、日本の何倍もの人が、それも若い人がたくさん見学に来ますよ」とビシッと釘を刺されてしまった。

因みにドイツからは修学旅行として若者が半ば必修的に見学に来るそうである。私が訪問中にもドイツからの中学生のグループが複数来ていて、それぞれ真剣な表情で、自国の先輩たち（彼らにしてみれば祖父さん祖母さんの年代）が犯した数々の残虐行為について説明を受け、神妙にメモを取っていた。



ドイツの歴代首相が近隣諸国は勿論、世界に対して事あるごとに自国の戦争責任を語り、謝罪を繰り返していることを見聞きする度に、このような歴史に真摯に向き合う態度が近隣諸国との良質な関係保持に役立っていると感じている。

少なくとも戦争指導者を神として祀ってしまっている靖国神社を「御国の為に尊い命を・・・云々」などと言って、いまだに国の指導者が崇めている限りは近隣諸国との関係は良くなることは明白である。

ドイツの例を見るまでもなく、70年前に遡って国民全体で戦争犯罪について真面目に総括し、キチンと反省と謝罪を行うことが絶対に必要である。また、それに付随して天皇が堂々と参拝できるような「施設」を造ることも必要になると思う。

ポーランド語での難しいガイド試験を突破した公式ガイドの中谷さん（ガイド料は7千円くらいだったと記憶しているが、行かれる場合は是非、予約をされていくことを強くお勧めする）の受け売りをいくつか記す。一つは、国としての援助以外にもドイツの工学系の大学生は休みを利用するなどして修復作業などの技術提供をボランティアで行っている。またポーランドの生徒は社会見学で必ず見学に来るそうである。日本の場合、社会見学として広島原爆資料館を訪問したことがある生徒がどのくらいいるのかと考えてみると、日本と言う国の「戦争」に対する教育の貧しさに慄然とする。

あ　と　が　き

今年、1945年の敗戦から70年になります。この節目の年に当たって、日本は立憲主義国なのにそれを守らず右傾化した安倍首相が戦後70年の談話を出すのか出さないのか、その内容はどうか国内外から注目されています。

国としての談話は、戦後50年の1995年は村山首相、戦後60年の2005年は小泉首相が閣議決定して発表してきました。二人の談話で共通するのは、日本は国策を誤り、アジア諸国の人々に対して多大な損害と苦痛を与えたことを反省しお詫びの気持ちを表明し、先の大戦における国内外のすべての犠牲者に哀悼の意を表しており、二度と戦火を交えることなく世界平和を追求していく決意を述べていることです。それ故に集団自衛権は憲法違反の立場をとっていることは言うまでもありません。

今日の政府・与党は「集団的自衛権の行使」容認など戦争のできる国へと舵を切り、その動きを加速化させていますが、反対する人、賛成する人それぞれ様々な意見があることは当然なことです。様々な意見が飛び交う中で誰しも認めているのは「戦後70年間、戦争せずに日本は平和を守ってきたこと」です。私達の仲間である91歳の関利雄さんは、戦争体験者であり今日の平和を守りたいという思いから、「戦争の恐ろしさ」の語り部として講演活動を続けています。

現在の人口1億2769万2千人の4分の3は戦後生まれで、何らかの形で先の大戦の影響を受けた戦前生まれの方は4分の1です。私達の周りには、戦中・戦後を生き抜いてきた多くの方がすでに亡くなっており、戦争体験等の記憶や思い出も風化しつつあり、戦争や戦災を体験した人たちは少なくなっています。

その人たちから聞いた話なども残したいという思いや、戦争の悲惨さを知らない子や孫の世代そして後世の人々に平和の尊さを引き継いでいくことが私たちの責務ではないかと考え、戦後の長い月日の経過とともに、戦争・戦災の記憶は薄れつつある中で、専科一期校友会の皆様のご記憶の中にあるものを思い出していただき、戦後70年平和祈念集作成の協力を会員の皆様に呼びかけたところ、27名のご投稿をいただき、ここに戦後70年平和祈念集を発刊することができました。厚く御礼申し上げます

今の平和な私たちには、想像することさえ難しい現実が皆さんの投稿文を通して伝わってきます。ある時は涙して読んでいたこともありました。そうした体験に触れることにより、平和について考え、そして平和を守っていかなければいけないと痛感しました。この戦後70年平和祈念集がみなさまの手を通して多くの人に読まれ、そして語り継がれることを願って止みません。

平成27年8月1日

専科一期校友会HP管理人・広報部長 岡村昭則

(第3種郵便物認可)

2015年(平成27年)8月3日(月曜日)

夕刊 読売新聞

元「隼」操縦士 祈りのメール

「失われた命と向き合う」

旧日本陸軍の主力戦闘機「隼」の操縦士だった関利雄さん(91)(さいたま市北区)が、インドネシアで撃墜された米軍機の搭乗員の遺族と、昨年から電子メールでの交流が続けている。これまで敵機を撃墜するなど戦果が誇らしかったという関さん。亡くなった米兵の名前や顔を知ったことで、「90歳を超えて初めて戦争が現実感のあるものになった。戦争で失われた命と向き合っていきたい」と語った。

(甲府支局 横山耕太郎)

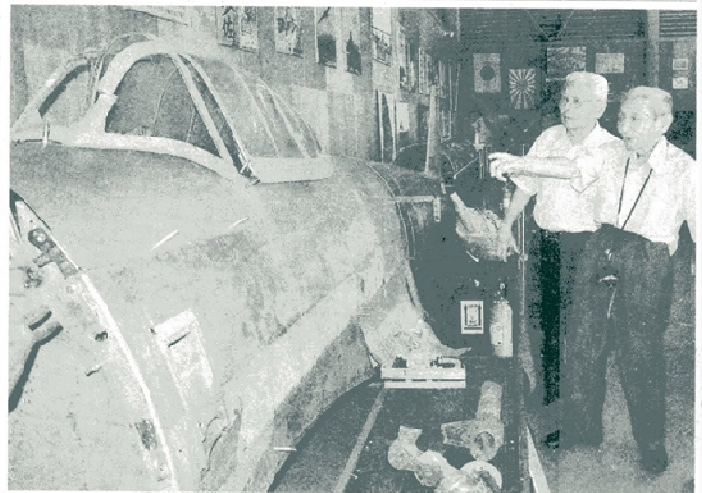
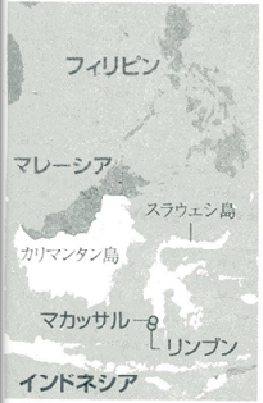
戦後70年

米兵遺族と交流

関さんは幼少の頃から戦闘機のパイロットに憧れ、16歳で少年飛行兵に合格。1944年1月に戦地だったビルマ(現ミャンマー)付近で初めて攻撃に参加した。最も記憶に残るのは、終戦直前の45年6月25日の任務。インドネシア・スラウェシ島のマカッサル港に敵機が接近中との情報がある4人が日本軍にとらわ



タイの基地で隼から降りる関さん(本人提供)



国内で唯一、隼の機体が現存している河口湖飛行館で70年ぶりに隼と対面した関さん(右)と今吉さん(7月31日)

れ、処刑された、と記されている。

関さんは「戦果を挙げたのが誇らしく、終戦後もその気持ちは変わらなかつた」というが、米軍の空襲について独自調査している

さいたま市浦和区の今吉孝夫さん(88)からの情報で昨年、B24の搭乗員の遺族を知り、「複雑な気持ちに変わった」という。複数の遺族が関さんとの交流を望み、昨年8月から電子メールのやりとりが始まった。

B24操縦士ローレンス・ベリー中尉のおいから今年新たにしている。

6月、「飛行機はどのようなに撃ち落とされたのか」とメールが来た。関さんが記憶の限り、戦闘の様子を伝えると、おいからは「関さんがご健康と聞き、うれしく思います。祖国に命をささげた話を伝え残すために、叔父の榮譽をたたえ続けたいです」と、感謝する返信があった。

また、B24の射撃手だったウェイン・ゲルツ伍長のおいからは、生前の伍長の写真とともに、「あの時代、兵士は戦場で祖国に尽くす義務がありました。関さんは兵士として義務を果たされました」とのメッセージを受け取った。

戦後、3人の子とも、5人の孫、2人のひ孫に恵まれたという関さん。これまでも戦争体験を語るなどしてきたが、「戦争がなければ、戦死した彼らも新たな家庭を築けたかもしれない。つらい過去だが伝えていかなくては」と気持ちを新たにしている。

隼 旧日本陸軍の戦闘機で、1941年に陸軍一式戦闘機として正式採用された。航続距離に優れていることから、中国、インドネシア、南太平洋の広い地域で使用された。海軍の零式艦上戦闘機(ゼロ戦)に次いで、約5700機が製造された。

風化する戦争の記憶
それぞれの戦後の想いのなかで
平和への願いを
世界に向けて発信しよう!



PEACE